
公益財団法人福武財団

地域振興助成

2022年度アートによる地域振興助成
成果報告書

Fukutake Foundation

| | | | |
|------|--------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | 葦の芸術原野祭 | | |
| 団体名 | 葦の芸術原野祭実行委員会 | 実施期間 | 2022年8月6日～2022年8月27日 |
| 代表者名 | 川村 喜一 | 活動地域(都道府県名) | 北海道 詳細エリア 斜里町(知床半島) |

活動の目的

葦の芸術原野祭実行委員会は、北海道・斜里町での地域芸術祭の企画・運営を通して、知床半島に根付く文化の再発見と、アートによる新たな価値観の創出を目指す有志団体。
 当団体は、「アート」と「地域の生活」を不可分の創造的行為と捉え、継続的な芸術祭の開催を通じて地域間・世代間コミュニケーションを図り、知床半島固有の多層的な文化の継承と、新たなアートの創出をおこなっている。長期的な目標として、アーティストインレジデンスの整備による当活動の通年化、産業・観光業、他機関との連携による芸術祭のエリア拡大を図り、知床半島における「アートによる地域振興」を実現していく。

活動の内容

2022年度の芸術祭では、参加型プロジェクト、音と身体表現によるパフォーマンス、インスタレーション展示、地元食材を用いたフードイベントを実施し、それらが相互に影響し合う場を創出した。会場(旧図書館)に残された空っぽの本棚を活用し、来場者から持ち寄られた思い出の品とエピソードを展示することで、「大きな歴史」には残らない郷土史・個人史を発掘し、来場者と場を作っていくプロジェクトを実施した。また、パフォーマンスでは、知床をテーマに地域住民と作家が小発表を繰り返し、それらを統合する新作『葦の波』を発表した。インスタレーション展示では多領域の作家が協働し、個々の作品の枠を越えた群像的な空間を展開した。

参加作家、参加人数

参加作家/Airda、あかしのぶこ、岩村朋佳、加賀田直子、加々見太地、川村喜一、川村芽惟、北山カルルス、黒木麻衣、小林大祐、今野裕一郎、坂藤加菜、佐々木恒雄、中山芳子、橋本和加子、船木大資、真青はてな、松本一哉、山田涼子
 参加人数/スタッフ含め総員32名(うち作家19名)

他機関との連携状況

斜里町立知床博物館による郷土史展示の合同実施、斜里町唯一の私設美術館「北のアルプ美術館」との連携展示、近隣飲食店舗でのワークショップ等を実施した。次年度は斜里町公民館との連携事業、その後は友好都市弘前市との共同イベント等を企画している。

活動の効果

2022年実施プロジェクトのうち、地域住民と参加作家の共同制作によるパフォーマンス作品『葦の波』は、最も大きな反響をもたらした。知床で暮らし始めた人と、知床で暮らし始めた人、知床を訪れた人たちが舞台上にさまざまな表現手段を持ち寄り、それぞれの経験や知床の風土、現存するものや失われたものを想像させる公演となった。満員御礼となり、発表後も多くの人々の心に残っていると耳にしている。

活動の独自性

多数のプログラムを同一会場で実施し、メンバーが「創作」と「運営」の垣根を越えて一体的に関わることで、芸術祭そのものを絶えず変化する有機体として駆動させることを企図している。アーティストが作品制作だけではなく、準備から当日までの運営を担い、地域の人々との交流を深めることで、アーティストの一方的な作品発表にとどまらない互恵的な場づくりを実現している。2022年度の「おもいでうろうろプロジェクト」では、古今のモノやエピソードを募り、郷土史・個人史の語り手と聞き手が出会う世代間交流の場が生まれた。また、これらの経験が新作オリジナル公演へと昇華され、地域に還元されるという循環を生み出している。

総括

継続開催を目指しながら、常に新しい交流を促し、会場を訪れる人々と共に数々の企画を実施することができた。第2回目となる2022年度の開催を経て、葦の芸術原野祭が着実に地域に浸透していることを実感している。
 19日間の会期で総来場者数は834人であり、昨年度の475人(13日間)を大きく上回る実績となった。来場者のうち2回以上来場しているリピーターが133人(16%)おり、日々変化する会場と人々との交流を楽しまれていた。「おもいでうろうろプロジェクト」の出品数は計158点、公演鑑賞者数は計128人。地域では当芸術祭を「あしげい」の愛称で認知してくださる方が増え、次回を楽しみにしてくださっている。
 会期中に実施したアンケートでは、「様々な人の想いに触れた/懐かしくも新しい知床を感じた」といった感想を多数いただいた。次回以降は、より地域の方々为主体となる企画と実施体制を確立していきたいと考えている。
 葦の芸術原野祭が地域に浸透し、地域にとっての豊かさになることが、当活動継続の要であると感じている。長期的な視座に立ち、地域固有の芸術文化を育みながら、葦の芸術原野祭を全国に反響を呼ぶイベントにしていきたいと考えてる。



地域共同制作新作オリジナル公演『葦の波』



遊休施設を活用し、老若男女が交流する会場



世代を越えて郷土史や個人史を継承する企画

| | | | |
|------|--|-------------|------------------------|
| 事業名 | 白老文化芸術共創 - ROOTS & ARTS SHIRAOI - 2022 | | |
| 団体名 | 白老文化観光推進実行委員会 | 実施期間 | 2022年8月27日～2022年10月10日 |
| 代表者名 | 熊谷 威二 | 活動地域(都道府県名) | 北海道 詳細エリア 白老町 |

活動の目的

2022年度は、以下団体の活動目的のうち、取り分け「2」「5」「6」を目的とする

- 1 地域資源、ひと、暮らし、風土、地勢、土地の記憶に光をあてる
- 2 新しい観点・手法・発信力を用い多様な価値観と創造性の理解伝達に努める
- 3 人と人・地域との絆、コミュニティ復興の契機となる
- 4 地域振興と経済活性、福祉教育の振興へ貢献する
- 5 住民と第三者が協働し地域の価値を「再発見、再編集、再構築」する機会の創出
- 6 住民の活力の創出、居場所や仲間づくり、人材育成(当事者・主体性意識向上)に努める
- 7 世界の多様性を尊重し、「共生の方法」を考える動機となり続ける
- 8 実績・ノウハウを積み重ね、次世代の未来へ継承する
- 9 文化観光による地域活性化の潜在的な力を住民、周辺地域と共有する

活動の内容

- 1 ROOTS & ARTS作品展→各アーティストがフィールドワークによって地域文化資源 [=ROOTS] や住民に出会い、多種多様な創作表現 [=ARTS] によって作品を制作・発表。
- 2 ウポポイ企画協働プログラム→多様性の尊重、多文化理解をテーマ軸にイヌイト等の北方圏、アイヌに限らない他地域先住民族の伝統技術を現在の創造性と掛け合わせ、町内複数会場で展示。
- 3 パフォーミングアーツ→国内外で高い実績のある先鋭的人形劇団「おたのしみ劇場ガウチョス」による地域滞在と発表。
- 4 ナイトプログラム→廃止された燈台や学校にて、光のプログラムを実施し、新しい「スポット」を生み出した。
- 5 アースワーク住民共創→町民連携プロジェクトを実施。地域住民・地元企業と連携したウッドデッキテラスや、白老川から採取した粘土を使用し、町民と一緒に土面を制作・展示。
- 6 音声プログラム「ラジオウタリ」→アイヌ音楽をはじめ、世界各地の伝承、音が生まれた背景やカルチャーなどを紹介。

参加作家、参加人数

参加作家／青木陵子、伊藤存、鈴木ヒラク、梅田哲也、是恒さくら、吉田卓矢、香川軍男、曾我英子、四辻藍美、おたのしみ劇場ガウチョス、大黒淳一、石川大峰、iruinai、森と街のがっこう、野生の学舎
 作品協働制作には住民他約200名、ワークショップ約50名、初のアートBUSツアーに約20名参加。来場者は約5000人。

他機関との連携状況

公益財団法人アイヌ民族文化財団/白老町/白老町教育委員会/

一般社団法人白老観光協会/白老町商工会/協同組合白老商業振興/苫小牧民報社/北海道新聞苫小牧支社/一般社団法人白老アイヌ協会/飛生アートコミュニティー/ウイマム文化芸術実行委員会 等

活動の効果

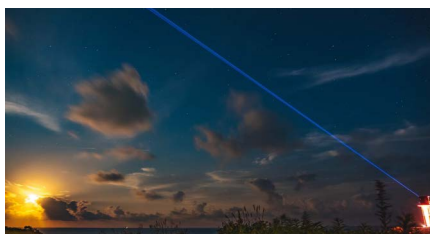
参加作家のリサーチ同行、会場受付のほか、作品の協働制作など、様々な場面で町民と文化芸術との接点や参画機会を創出。会期中は来場者に観光地ではない、生活圏を含む土地の魅力を発信できたと同時に、交流人口拡大が図られた。回遊・移動を促すことで自然景観や食をはじめ生活文化や国立施設とは違った土地に根づくアイヌ文化を感じ得る体感の提供ができた。アートを介した他者や町民同士とのコミュニケーション、多様な価値観への理解促進の場が多分に生まれた。

活動の独自性

- 町の回遊:町の商店街を中心に東西25kmの小集落地にも作品スポットを点在させた。ウポポイと温泉地が一般的な観光場所であるが、立ち寄り機会の少ない場を展覧会場とすることで、来場者の町内回遊を促し、知られざる町の魅力や生活文化に触れる機会を創出。
- 文化発信スポットの創出:ギャラリーやオルタナティブ空間がほとんど無い小地域にて、空き倉庫や工場跡、廃止の燈台、神社境内や廃校の校庭などを創造・発表の場、人々が立ち寄り発信の場として創造。
- 地域固有の物語の作品化:レジデンスに創作人形劇団が参加。地域散策や文献調査、町民への聞き取りと交流、アイヌ伝統技法を学ぶ活動などを経て、地域に残る伝承の物語を人形劇として発表。多くの園を巡り、幼児や親子が文化芸術に触れる機会を数多く創出。

総括

参加作家、会場数、会期などの規模感、住民スタッフの参加や各実施内容を含め、多くの「初実践」があり、いずれも21年度を大きく上回る規模となった。作家滞在リサーチや制作過程では地域の素材や資源を発掘する作業による再発見の共感や、作家と地域との結びつきが生まれた。文化芸術に触れる機会として、障がい者施設や子育て世代層、地元陶芸家などとの共創の他、アイヌ文化伝承者、水産加工業、大工や木材加工場、図書館やスーパー、飲食店などで数多く生まれた協働は、個々の立場・世代・思想や生活背景を超えた多様な価値観を享受し合えるアートの有効性、多様性を目指す地域振興の可能性を示すことができたのではないかと。札幌発着のバスツアーはウポポイによらない初プランであったが、地域生活圏を歩き巡る内容などで好評を得た。22年度は未だコロナ禍の中であったが地元文化活動2団体の実施プログラムと会期を合わせる相互協力により参加者の回遊性を高められた。一方で運営面では準備不足や制作進行の遅延、スタッフの疲弊などが起きた。22年度に町や人々に生じたポジティブな空気感や流れを活かしつつも、健全性を担保できる運営計画が必要である。



行政職員と地域住民の共創が図られた光のプログラム



就労支援施設と協働の作品制作、個性感性が爆発



会場に呼び込まず、小地域に向く人形劇舞台

| | | | |
|------|--------------|-------------|-----------------------|
| 事業名 | 北奥のF”UNKASAI | | |
| 団体名 | 株式会社風景屋 | 実施期間 | 2022年7月16日～2023年2月26日 |
| 代表者名 | 小林 徹平 | 活動地域（都道府県名） | 青森県、秋田県 |
| | | 詳細エリア | 十和田市、鹿角郡 |

活動の目的

以下2つのミッションのもと、かつて一大観光地として栄えた十和田湖畔休屋地区が、“消費される観光地”から脱却して大自然とともにある“文化醸成地”となることを目的に活動している。

ミッション①：十和田湖畔がこの土地らしく続いていくために、自然と人間の在り方と“上質な日常”とは何かを考え続ける。

ミッション②：日々の美しい自然に呼応するような、新しい視座をもたらすものとしてアートを挿入し、人々が新たに十和田湖の楽しみ方を発見できるような仕掛けを創り出す。

活動の内容

2022年の初年度は、2018年から開催してきたマルシェで音楽イベントも同時開催し、そこへ現代アートや食のイベントを追加する形での開催となった。

- 1 とわだこマルシェ：7月と10月の2回、主に青森県・秋田県の生産者、飲食店、クラフト作家が毎回15店舗ほど出店。マルシェ来場者でアート作品鑑賞希望の場合はご案内した。7月には八戸市で音楽活動をする団体の音楽ライブも同時開催した。
- 2 現代アート：キュレーター兼アーティストとして鳥袋道浩氏、アーティストとして中山見子氏が参画。会期中合計5点の作品を滞在制作し公開した。
- 3 食イベント：「地域の食を耕す 北奥レストラン」と題して、地域食材をふんだんに使用し新たなレシピを開発するPOP UPレストランを開催した。音が生まれた背景やカルチャーなどを紹介。

参加作家、参加人数

参加作家／鳥袋道浩、中山見子
 食の専門家／楠田裕彦、真藤舞衣子、大越基裕
 アート作品鑑賞者数：約100名／アートイベント参加者数：延べ約100名／マルシェ来場者数：約1,000名／音楽ライブ参加者数：約60名／食イベント参加者数：約30名

他機関との連携状況

地元協賛企業（株式会社PEBORA、協同組合タッケン、三八五流通）、協賛協力（株式会社東北博報堂）、環境省十和田八幡平国立公園管理事務所、地元宿泊事業者、地元小売店、地元飲食店、JR東日本

活動の効果

初年度から地域住民や作家との協働による制作が自然発生的に生まれたことや、地域住民にとってもハッとさせられる瞬間や十和田湖の新しい一面を発見する機会があったことは、特筆すべき結果だと考える。主催者がお膳立てをせずとも“文化を醸成する”上質な時間が訪れたことは、主催者だけでなく参加者の心にも強く残ったと感じる。自然を深く洞察し人々に新たな視座をもたらす試みは、観光や関係人口増という概念から飛び出し、これからの十和田湖で自然と人がどのように共存していくかを考える契機となったと考えられる。

活動の独自性

会期を夏から翌年の冬（7～2月末）までと長期間で設定することで、アート作品鑑賞やイベント参加の際に、四季折々、刻一刻と変化する十和田湖の自然に触れてもらうことを意図している。そして、アート作品鑑賞を完全予約制とすることで、この土地を通り過ぎるのかのように訪れる一般的な観光客が対象ではなく、強い目的意識をもって訪れる人のみを受け入れるという、ある種閉鎖的にも見える取り組みとなった。しかしながらそれは、質より量を追い求めてきた観光へのアンチテーゼとも言え、それに共感を示し訪れてくれる人々は必ず一定数いると信じているし、それが事実であることがわかった。初年度でこれを強く実感できたことから、次年度以降もブレることなくこのやり方で取り組んでいこうと考えている。

総括

純度の高い自然に囲まれた十和田湖を、アート作品というメディアと作家の新たな視点を通して見ていくという行為は、長年この地域に暮らしてきた地域の人々にも大きな発見につながり、ひいてはここに暮らす喜びを再発見／再認識することにも繋がったのではないかと考えている。これは参加者の感想でも聞かれたことだが、主催者且つこの土地に暮らす一人の人間としても初年度からこれを実感できたことは大変大きな収穫であるとともに、今後も継続していくための大きな後押しとなった。

次年度以降は、前年度参加したアーティストがもう1組のアーティストを選出する形で、アーティストのバトンが渡っていくことが“キュレーション”のようになっていく形を目指していく。また、現代アートに加え日本の伝統芸能である講談の十和田湖オリジナル講談も制作発表することで、初年度以上に幅広い年齢層の多様な人々にアプローチしていきたいと考えている。

現状福武財団の助成金・企業協賛・自己資金のみという運営費の脆弱性については今後も課題となるが、表層的なアートイベントにならないよう、地域住民やアーティストと共に自然と対峙していくことでこの地の新たな文化を醸成していきたい。



中山見子「湖畔遊覧記」公開収録風景



アーティストによる作品鑑賞ツアーの様子



7月のとわだこマルシェ出店者との記念撮影

| | | | |
|------|----------------------------------|-------------|-----------------------------|
| 事業名 | River to River 川のほとりのアートフェス 2022 | | |
| 団体名 | ya-gins | 実施期間 | 2022年10月22日～11月13日の金土日祝12日間 |
| 代表者名 | 八木 隆行 | 活動地域(都道府県名) | 群馬県 詳細エリア 前橋市 |

活動の目的

コロナ禍からの地域の芸術文化活動やコミュニティの再興、アート関係者への支援、これまで前橋で行われてきた地域の人達とアートプロジェクトを通じて提示した問題や価値観を市民や街が継続的に支えること、前橋の歴史や文化の発信と活用、保存についての問題提起していくことを目的に、2021年より街を回遊しながら多様な作品を楽しむことができる「River to River川のほとりのアートフェス」を開催している。

活動の内容

前橋の中心市街地の歴史的建造物や文化芸術拠点10ヶ所に、前橋内外のアーティストを招聘して作品展示と作品やグッズ販売を行った。文化財の建築空間を活かした滝沢達史によるインスタレーションと、広瀬川美術館の建築や収蔵品とコラボレーションした衣真一郎の絵画や陶作品、赤い糸を持った人物写真で見えないつながりを描く市民参加型のコセリエ/ITOPROJECT、来場者と会場を出て1対1のパフォーマンスを行う内田望美、透明なモチーフと光を構成して心象風景を描く牛嶋直子、太平洋戦争～戦後の日米関係をテーマにした増田拓史による映像と写真と立体インスタレーション、市内の母子生活支援施設に入居する母子と長期プロジェクトを行うタイムカプセルプロジェクトは活動報告を展示した。

参加作家、参加人数

参加作家／滝沢達史、衣真一郎、牛嶋直子、増田拓史、コセリエ/ITO PROJECT、内田望美、タイムカプセルプロジェクト(廣瀬智央+後藤朋美+のぞみの家)

来場者数／全会場の延べ人数 3187人

※2会場はパスポート不要で観覧可能のためカウントせず

他機関との連携状況

今年度初開催の大規模イベント「前橋BOOK FES」(主催：前橋BOOK FES 実行委員会、共催：前橋市)等と連携・相互発信を行なった。今回初めて地元企業・団体から協賛を、3会場は昨年度の開催を受けて声をかけていただき会場として使用した。

活動の効果

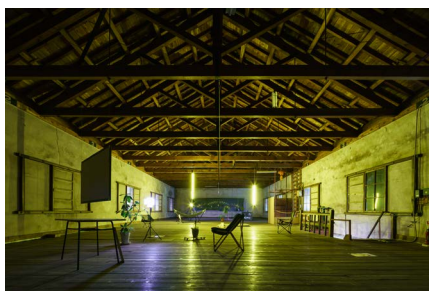
コロナ禍でアートを通して人々が交流する機会が減っていたが、それを回復する機会になった。来場者からは、古くから存在しているが初めて訪れた会場があり新たな街中の魅力を発掘する機会になった、市民参加型の作品や社会的養護が必要な人と協働しているプロジェクトの紹介展示の感想としてアートができることを考えた、との声もあった。アートを通じて地域の歴史や魅力、課題を考える活動になった。

活動の独自性

前橋にゆかりのある作家や移住者、旧安田銀行担保倉庫や広瀬川美術館といった歴史的建造物、BentenaSHOPやヒロセヌバドルなど新しく生まれ変わった建物など、(新-旧)と(内-外)が入り混じり、重層的、多様な様相や人々とのつながりをアートフェスを通じて可視化している。街なかの関係者と密に情報共有することで、他団体のイベントなども併せて発信し、街なかを多面的に楽しめるよう企図している。

総括

今回は、前回と比べて以前から行われていた他団体によるイベントが復活したり、新規のイベントも開催されるなど、街の動きが活発になってきた。中でも市内外から4万人を超える人々が訪れた「前橋BOOK FES」は関連イベントとして本事業も位置付けられた。街のプレイヤー同士が連携し、各々の得意な分野を持ち寄って展開できるのが、地方都市にある可能性だとも感じた。本事業を2か年開催する中で、フェスの準備期間やITO PROJECTなどの参加・協働型の作品が、初めて出会う人、コロナを経て久しぶりに会う人たちの交流・再会の場になっていた。現在の前橋では、前橋にゆかりのあるアーティストの作品と街とをまとめて鑑賞する機会は、本アートフェス以外はないので、今後も実践を積み重ねていくことで見えてくるものもあるのではないかと期待している。これまで培ってきた関係性と、学生などの若者にもアートフェスに関わってもらおう中で、アート以外の様々な領域の人たちが行き来しはじめている。次年度以降は運営に継続的に関わる人を増やすこと、これまでの作品やプロジェクトの言語化にも意識的に取り組み、変化していく街の中でアートによる地域への洞察をより具体的に深めていきたい。



滝沢達史《桃源郷》旧安田銀行担保倉庫
写真 Satoshi Mori



衣真一郎《山と川》広瀬川美術館
写真 Satoshi Mori



コセリエ《ITO PROJECT》Bentena SHOP

| | | | |
|------|-----------|-------------|----------------------|
| 事業名 | クロスプレイ東松山 | | |
| 団体名 | 医療法人社団保順会 | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 辻 守史 | 活動地域(都道府県名) | 埼玉県 詳細エリア 東松山市 |

活動の目的

埼玉県東松山市の高齢者福祉施設「デイサービス楽らく」(以下、楽らく)に、年間を通じて様々なアーティストが滞在。作品制作やリサーチを通じて利用者や職員と文化的な交流を重ねることにより、予定調和ともなりがちな施設での日常に、非日常的な要素と、新たな出会いや発見をもたらす。また楽らくを拠点に地域に活動が開かれることにより、福祉施設が特定の人のためだけの場所ではなく、地域内の様々な人にとっての文化的な出会い・交流が起こる「福祉施設であり文化施設でもある」場所として機能することを目指す。また活動を通じて、関わる人々がケアの創造性に触れるとともに、その概念を広げ・深めていくことを目指している。

活動の内容

<アソシエイトアーティストによる活動>

- 1 利用者から思い出の曲を募集し、架空のラジオ番組を作るワークショップを実施。リクエスト曲と共にエピソードを聞いた。
- 2 利用者の思い出の写真とエピソードをリサーチ。パネル化し、楽らくと市内のcomeya galleryで写真展を開催した。
- 3 楽らくの日常を題材にした舞台作品を創作。利用者や職員も出演し、楽らくと東松山市民文化センターで上演した。また、内容を深めるトークを同時開催した。

<公募アーティストによる活動>

施設の日常活動で使えるオリジナルの体操道具や、滞在エピソードが混ざった物語などを創作した。滞在中、若手アーティストが福祉現場でのアート活動の経験を積む機会を創出した。

参加作家、参加人数

アソシエイトアーティスト/白神ももこ、アサダワタル、吉田幸平・吉田和古
 公募アーティスト/松橋和也、安村卓士
 舞台作品鑑賞者/延べ174名
 写真展鑑賞者/約180名、展示に応募した利用者17名

他機関との連携状況

一般社団法人ベンチと共同で事業を主催。プロジェクトによって、東松山市民文化センター、comeya galleryとも共同で事業を主催した。またNHKさいたま放送局が継続的に事業を取材。NHK総合にて放映いただいた。

活動の効果

利用者とアーティストとの多様な出会いが生まれた。多くの利用者はアーティストと過ごす時間を楽しんでおり、生き生きとした様子が伺えた。職員は、当初は施設に外部からアーティストが来ることのイメージがつかなかったが、アーティストの人柄や利用者の変化に接する中、自然に連携協力する関係が生まれていった。また作品発表を通じて、福祉との連携に関心の高い芸術文化関係者や、地域の人々が取り組みを知る機会が創出された。

活動の独自性

本事業の特徴は、アーティストがそれぞれ独自の時間の使い方を通じて利用者や職員、地域住民と交流することだ。アーティストが宿泊する機能を常設的に持ち、レジデンスプログラムが継続的に行われている高齢者福祉施設は、他に類のない場所と言えるだろう。本事業では、アーティストの役割は「先生」ではない。滞在中を通じて利用者、職員との関係を構築し、アーティストならではの視点から様々な提案をすることにより、施設に新たな価値観をもたらすことに本質がある。実施において、福祉の現場にとっての価値観と、アーティストが大事にする価値観を共に尊重する体制を作っていることも、特筆点として挙げられる。

総括

2022年6月に移転新築した福祉施設内に、アーティスト1名が宿泊して創作活動可能なスペースを設け、プロジェクトが始まった。利用者の中には、これまで長らく話してこなかったエピソードを初めて語ってくれた方や、アーティストと踊る時には普段必要な歩行器を全く使わなくなる方、思い出の曲をラジオで紹介してくれて嬉しかったと繰り返し語る方など、プロジェクトへの関わりが刺激となったことが伺える方が幾人もいた。特定のサービスの提供を目的に施設全体の仕組みがデザインされることが多い福祉施設において、アーティストという存在を受け入れることは大きな挑戦だったが、アーティストの眼差しを通じて様々な気づき生まれ、介護の仕事の即興性や創造性を捉え直す機会ともなった。またアーティストにとっても、特別な存在して扱われない環境に身を置くことで、自身や表現のあり方を問い直し、深める結果となった。今後の課題として、これら価値の言語化と発信、福祉と芸術をつなぐ人材の育成、地域との交流の深化などが挙げられる。老いや認知症をネガティブな側面だけではなく、高齢者一人ひとりに積み重ねられた歴史や言語化されない豊かな知恵などを側面から捉え直し発信することにより、高齢者や福祉施設に対する社会の価値観を更新できるよう、今後も取り組みを続けたい。



白神ももこダンス公演



アサダワタル「楽らくラジオ」



comeya吉田幸平・吉田和古写真展

| | | | |
|------|----------------|-------------|-------------------|
| 事業名 | 原泉アートデイズ! 2022 | | |
| 団体名 | 原泉アートプロジェクト | 実施期間 | 2022年4月1日～3月31日 |
| 代表者名 | 羽鳥 祐子 | 活動地域(都道府県名) | 静岡県 詳細エリア 掛川市原泉地区 |

活動の目的

- 1 2018年から実施してきた、原泉アーティスト・イン・レジデンス(以下、HARAIZUMI AIR)の認知度向上。
- 2 2017年より活用している旧原泉第2製茶工場を拠点とし、地域に根ざした恒常的なアート活動を推進すること。
- 3 来場者の増加を図り、地域内外への新たな人の流れの循環の創出に貢献し、アートストアの活性化により更なる自主財源獲得等につなげる。
- 4 国際的なネットワーク強化を視野に入れた海外との関係構築を行うこと。
- 5 以上の目的を達成することにより、地域コミュニティでのアート活動をより一層日常化させる。

株式会社森の都ならここ、近藤歯科クリニック、BRUNObike、POWAPOWA 支援/アーツカウンシルしずおか

活動の効果

掛川市都市政策課協力の下、掛川バスサービス(株)が掛川駅発の路線バスを会期中週末限定で増便した。5年目開催であることによる事業への期待と、バス利用活性化の可能性を見出しているという評価の指標として捉えている。今後複数年かけて利用を周知していくよう行政と協力し計画を立てていく予定だ。

活動の内容

- 展覧会期間:2022年10月13日(木)～11月27日(日)(月・火・水休業)
- HARAIZUMI AIR実施中のプログラム開催
 - 1 レジデンスプログラム:アーティスト滞在中の毎日の共食内容を記録し、地域資源とアーティストの暮らしとの結びつきを可視化。(HARAIZUMI AIR MEALS)
 - 2 オープンスタジオプログラム:滞在中のアーティストトークを実施。原泉での唯一無二の制作体験を地域内外に発信。
 - 3 企業連携プログラム:地元企業の協力を得、地域内のキャンプ場の遊休施設を活用した宿泊型展覧会「HARAIZUMI ART CAMP」を、滞在中のアーティストと連携して実施。スイス発自転車メーカー『BRUNO』とコラボ2日目。来場者が自然とアートを体験できる機会を提供。
- 旧原泉第2製茶工場の積極的利用。その他、展覧会時には地域内の約9ヶ所の遊休施設を活用。
- 国際交流プログラムとして、長期的な中国との連携構築を見据えた中国人アーティストの受け入れを行った。

活動の独自性

当事業は、HARAIZUMI AIRの一環で成果発表の場としての位置付けで開催している。毎年春から秋にかけて参加アーティスト達が一定期間以上滞在、地域コミュニティと交流しながら制作に臨む。制作する日常に焦点を置き、特にアーティスト達の原泉での暮らしを形作る毎日の食卓を囲む共食プログラム、HARAIZUMI AIR MEALSが特徴。アーティスト同士、サポーター、時には地域の方も交え、食卓の場で日々の情報や何気ないアイデアの交換、信頼関係の構築を行う。地域からの差し入れなどを使って調理された料理を食し、食材を通してアーティストが土地とつながり、身体的に地域と交わり、作品制作の糧を得ている。今後は、大学と連携し心理学の視点から調査研究を行うチームで、日々の食文化から地域とのつながり、制作への好影響などをリサーチ予定。

参加作家、参加人数

アーティスト/3カ国14組(日本・米国・中国)/中瀬千恵子、野々上聡人、ソノチ、Robin Owings、安藝悟、井口貴夫、ミナミリョウヘイ、弓場勇作、松島家(誠・礼・花)、西村卓、和田峻成、楡木令子、高飛、庄然

【5周年記念講演会】

講師/福住廉氏 ファシリテーター/櫛野展正(アーツカウンシルしずおか) 来場者/2,500名

総括

当事業は、2018年より開催を続け、5周年を迎えた。祝祭的な華々しさよりも、地域の中で日常となりつつある、アーティスト達の制作風景をどのように持続させるかについて検証し実験していくことが活動の軸となっている。2022年度は、節目にあたり、今後私たちが何を目指し、どのようなプロセスを生み出していくべきか、改めて振り返る年となった。5周年記念講演会の開催では、『現代美術の民俗学的転回』というテーマで美術評論家の福住廉氏に基調講演いただいた。多様なステークホルダーと共に聴講し、当事業を客観的な視点から観察することができた。アニバーサリーブック制作では、5年分の作品アーカイブ、関係者同士のネットワークの再構築、そして当事業の成り立ちや思いを外部発信することなどの成果につながった。また、全ての地域関係者に献本還元し、これまでの感謝と敬意の気持ちを伝えることができた。今後は、展覧会である当事業とHARAIZUMI AIRの特異性を強化すると共に、地域全体でアートのある日常が開放されている場づくり(HARAIZUMI ART PARK化構想)を目指して、プロジェクトコミュニティの拡充、海外ネットワークの強化、年間を通じた拠点開放と発信に取り組む。

他機関との連携状況

協力/原泉地区まちづくり協議会、資生堂企業資料館、資生堂アートハウス、農事組合法人 原泉茶業組合、オルタナティブスクール実りの泉、さくら咲く学校、昌光寺、FUNNY FARM、GAMA coffee、omedarida、eatful life 協賛/しばちゃんランチマーケット、掛川市森林組合、有限会社 佐藤工務店、



5周年記念講演会(講師:福住廉氏)の様子



AIR 期間中のアーティストトーク(ソノチ)



HARAIZUMI AIR MEALSの展示の様子

| | | | |
|------|----------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | 紀南アートウィーク 2022 | | |
| 団体名 | 紀南アートウィーク実行委員会 | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 藪本 雄登 | 活動地域(都道府県名) | 和歌山県 詳細エリア 有田川町、上芳養町 |

活動の目的

紀南地方(和歌山県南部)を代表する産物である「みかん」を中心に据えたプロジェクト。農家の方々も自然の恵みを現出させる表現者＝アーティストであると捉え、現代アーティストの方々を交えた、肩書に捉われない有機的な集団(コレクティブ)で、地域で可視化・言語化されていない価値を表現し、世界へ発信する。また、2021年秋に実施した芸術祭「紀南アートウィーク2021」にて邂逅した、多様で生命力豊かな方々との結びつきを強め、この地域でアートを媒介とした活動を継続的に進めていくための持続可能な繋がり(コミュニティ＝コレクティブ)づくりにも取り組む。

活動の内容

10月に実施した展覧会「みかんマンダラ」展を起点に、開催に向けた準備期間に行ったフィールドリサーチや、専門家等を交えたトークセッションなどを通して、実り・菌・土・神話の4つの展示テーマを設定。1会場1テーマとし、それぞれのテーマと響きあう会場、作品をキュレーションして展示を行った。また、開催中にはのべ13の関連イベントを実施。様々なトークや絵画ワークショップ、親子での農園体験、土壌の薫りを感じる食事会や、未来の農園作りを目指してみかんの苗木を地域の里親に預ける贈呈式なども行った。

展覧会の総括はホームページに記事としてアップし、来場いただいた様々な専門家たちのレビューも掲載した。1月にはアーティストや展示会の関係者、農家の方々などを招いたささやかな新年会、2月には40種近い柑橘を味わえる食事会なども実施。

参加作家、参加人数

参加作家/廣瀬智央(日本)、ビー・タケム・パッタノパス(タイ)、ピヤラット・ピヤボンウィット(タイ)、トゥアン・マミ(ベトナム)、クイン・ドン(ベトナム)、狩野哲郎(日本)、AWAYA(日本)、bacilli(日本)、クウワイ・サムナン(カンボジア)、VR蕎麦屋タナベ(日本)

展覧会参加人数/約2,000名

関連イベント数(年度内)/20回

他機関との連携状況

後援/和歌山県、田辺市、田辺市広育委員会、田辺観光協会、(株)紀伊民報、FM TANABE、テレビ和歌山

協力/ivory books、秋津野ガルテン、Artport (株)、Yeo Workshop、石山喜重子、石山登啓、伊藤農園、橋本神社、Gallery Ver、熊野ログ、藏光農園、K型 chocolate company、coamu creative、小谷農園、小山登美夫ギャラリー、Colographical、Sa Sa Art Project、Shinju、鈴木農園、NPO法人ZESDA、十秋園、湯治のできる宿 しらさぎ、Nha San Collective、

紀州原農園、文化科学高等研究院、ふたかわ超学校、一般社団法人MAP、まつさか農園、松下農園、まるまつ農園、南方熊楠顕彰会、明光バス(株)、ユカ・ツルノ・アートオフィス、Restaurant Caravansarai、ワカヤマスコラボ

活動の効果

地域を代表する産物であるみかんを主軸に据えたため、国際芸術祭として開催した2021年に比べ、地域の方々には興味を持ってもらいやすく、改めて暮らしのすぐそばにある柑橘の持つ意味などを考え、感じてもらうきっかけを創出することができた。特に本年は地域内の鑑賞者を増やすことを目標としていたため、とても手応えを感じた。また、リサーチから協働していただいた農家の方々にとっても、アートや人文学的な視点から柑橘を眺めることはとても刺激的であったようだ。

活動の独自性

行政の補助金やバックアップを受けない、完全民間型のアートプロジェクト/芸術祭として、短期的な指標を重視せずアジャイルな運営を行いながら、活動の収益化などにも積極的に取り組んでいる。フィールドである熊野は、歴史・風土・文化・自然などの様々な文脈が深く交差しながら堆積しており、現代アートや文化人類学などの視座を通して、地域のもつそれらの価値を再解釈・再定義しなおして、可視化や言語化することを行う。また、全世界へ向けた地域文化アーカイブスとして、HPやSNSでは全て日英の二言語で発信を行っている。

総括

複数会場での大規模な国際芸術祭として行った初開催の2021年に続き、テーマをシンプルにし、地域に根ざした活動にシフトすることを目的とした2022年度の活動。

作品の展示だけでなく、年間通して開催した多くの関連イベントにおいて、地域の様々な人々とコラボレーションすることで、コレクティブ(＝コミュニティ)の土壌づくりに取り組み、多くの賛同者を得ることができた。アーティストだけでなく、農家、学者、デザイナー、ボランティア、展示を鑑賞してくれた子どもたち、など、肩書などを問わないこういった繋がりを丁寧に紡いでいく事が、今後の活動の基盤になると再確認することができた。

現代アートに限らず、文化的な楽しみのまだまだ少ない地方都市では、こういったローカルな輪を広げていくことはもちろん重要だが、同時に、世界の潮流にもアンテナを張りながら、グローバルな強度を持ち得る活動として、バランスを意識して取り組んでいきたい。

今年度のテーマであった「みかん」は今後も継続し、本年度に提示した様々な問いや気付きをより深めながら、新たなリサーチやアウトプットを行い、「まずは10年継続する」という一つの目標を目指して活動を行ってきたい。



未来の農園へ向け、苗木を里親に預ける贈呈式。
写真 Manabu Shimoda



トークイベントは同時配信や文字起こしも行う
写真 Yoshiki Maruyama



廣瀬智央《みかんコレクティブ》2022年 展示風景
写真 Manabu Shimoda

| | | | |
|------|--------------------------------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | 熊本地震で損壊した田中憲一作品を修復して御船地域の文化復興を牽引する事業 | | |
| 団体名 | 熊本地震 田中憲一の画を救う会 | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 渡邊 秀和 | 活動地域(都道府県名) | 熊本県 詳細エリア 御船町 |

活動の目的

2016年4月に震度7の地震に二度襲われ、震源地の一つ熊本県上益城郡御船町にあった故・田中憲一(1926～1994)のアトリエが全壊し、地域の芸術文化復興のために残されていた150点余の油彩画が倒壊家屋の下敷きになり長雨にさらされていたのが、熊本の近現代美術にとっては最も大きい被害だった。田中は教鞭を執りながら創作活動を続け、晩年は地元で地域の歴史や文化を掘り起こし、芸術文化を再興する活動のリーダーだった。この田中の代表作を修復・保存するとともに展示活用をしながら、田中の中学・高校の先輩である浜田知明や井手宣通など、多くの美術家の故郷でもある地域の文化復興をめざしていく。

活動の内容

- 被害が大きい田中作品の大作2点を修復する。修復はIWAI ART保存修復研究所にお願いし、国際特許取得の最新の修復技術も使い修復を完成させる。
- 「フットパス・知明少年の通学路を歩く」のマップを作成。広報資料として配布し、マップを活用したフットパスを春と秋に開催する。
- 熊本県立美術館分館ギャラリーで、これまでの活動成果を紹介する「田中憲一・被災/レスキュー」展を開催する。
- 学習会「無言館の画家・佐久間修と静子」等を開催する。
- 缶バッジや絵葉書、スケッチブックなど、オリジナルグッズを制作し、今後のイベントで使用。協力者を広げる。

参加作家、参加人数

- 岩井希久子(絵画保存修復家)、岩井貴愛(絵画保存修復家)
- 「フットパス」
スタッフ/事務局等10人、参加者/春・21人、秋・15人
- 「田中憲一・被災/レスキュー」
展出品作家/田中憲一、井手宣通、佐久間修、浜田知明
来場者/1,060人、学習会参加者/29人

他機関との連携状況

IWAI ART 保存修復研究所、御船町、御船町教育委員会、御船町文化協会、御船町観光協会、熊本県教育委員会文化課、熊本県立美術館分館、熊本県文化協会、(一社)アートネットワーク熊本みふね など

活動の効果

コロナ禍が続く中で「フットパス」や「学習会」への参加者を少人数や町内在住者に制限をしなければならず、多くの参加者を望めなかったのは残念だったが、「被災/レスキュー」展の開催や「学習会」、「フットパス」等の活動の新聞・テレビでの報道を通じて、地域の人だけでなく多くの人への理解や関心が高まってきている。町外からの問合せも増えている。オリジナルグッズもできたので、今後のイベントで活用していきたい。

活動の独自性

地震で全壊したアトリエから地元画家の作品150点余を救出し、修復して保存・展示を可能にし「地域の宝」として未来に伝えようというプロジェクトを、公的な支援が見込めない中、自らも被災した地域住民有志が中心になって始めた。それは、そのままではゴミになってしまう作品への愛着だけでなく、画家がめざしていた地域の芸術文化の再興の願いを引き継ごうとすることでもあった。それに、絵画保存修復の専門家や大学の保存科学の研究者などの支援が得られ、さらに多くの団体・企業・個人からの協力を得て、ほとんどの作品の修復・保存の計画が実現している。修復した作品の紹介・展示や「熊本のバルビゾン・みふね」と呼ばれる地域の美術文化への関心・理解を拡げる活動も継続している。

総括

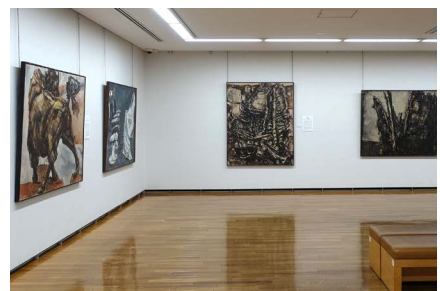
熊本地震 田中憲一の画を救う会は「平成28年熊本地震」直後の2016年7月に、救出した作品への公的支援が得られないと分かり、故・田中憲一を知る地元の有志で結成。以来、多くの専門家、企業、大学、個人の協力を得て活動を続けてきた。2020年度からこれまでの活動が認められて、修復費の2/3を熊本地震被災文化財復旧補助金で得られるようになったが、残りは当会の負担になっているので、「アートによる地域振興助成」を受け、今年度の修復事業が可能になった。熊本県立美術館分館で「被災/レスキュー」展を開催でき、多くの人からこれまでの活動への感謝の言葉をいただき今後の活動の励みになった。また将来のことを考え、修復した作品だけでなく田中憲一という画家を生んだ地域の美術文化の豊かな歴史を伝え、新たな芸術文化を再興するために、定期的な「御船町フットパス」の開催や御船の美術についての「学習会」の開催を通してさらに理解者や協力者を増やしていく目標ができた。現在、修復を終えた代表作は御船町カルチャーセンターに常設展示をしているが、今後は作品を展示・公開・保管する施設を多くしたり、地元の小・中学校などへの出前授業などを実施していきたい。



地震の被害がひどかった油彩画の修復作業



フットパス「知明少年の通学路を歩く」開催



修復を終えた田中作品を紹介する展覧会開催

| | | | |
|------|-----------------------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | イミグレーション・ミュージアム・東京(通称: IMM) | | |
| 団体名 | 特定非営利活動法人 音まち計画 | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 岡部 修二 | 活動地域(都道府県名) | 東京都 詳細エリア 足立区 |

活動の目的

美術家の岩井成昭が主宰する「イミグレーション・ミュージアム・東京」(2010年～現在)は、地域に居住する海外ルーツをもつ人びととの交流を通じて企画されるアートプロジェクト。「ミュージアム」という名称でありながら施設を持たず、東京都足立区の空き店舗や教会などを転々と移動しながら活動を展開している。

10年以上の活動の蓄積をもとに、多文化社会を「知り」、多文化社会を「考え」、多文化社会に「参画」していくプラットフォームとなることを目指し、多国籍化の進む都心地域から多文化社会を多角的に問い直すきっかけをつくらせる。

活動の内容

足立区内の小学校を対象に「アート・エデュケーションプログラム」を実施。アートを通じて文化的多様性を知ることが目的に、オリジナルのプログラムを開発した。具体的には、(1)身体を使ったプレクチャー (2)対話型鑑賞 (3)海外ルーツのアーティストによるアーティスト・ワークショップ (4)(1)-(3)を振り返るワークショップという4段階でプログラムを構成した。

実施校については、足立区と連携しながら区の世論調査から多文化共生を課題としているエリアを抽出し、そのエリアに位置する小学校4校を選定した。2022年11月から2023年1月にかけて、実施校の5、6年生を対象に、計7日間にわたるプログラムを実施した。

参加作家、参加人数

アーティスト/クロエ・パレ、セビーデ・ハセミ
 アートコミュニケーター/一般社団法人アプシエイトアプローズ
 運営スタッフ/IMM東京事務局、東京藝術大学の学生、IMMねいばーず
 生徒計237名のほか、校長や担当教員、自治体職員など約20名がプログラムに参画した。

他機関との連携状況

足立区(シティプロモーション課)、東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科

活動の効果

実施後、担当教員へのヒアリングと子どもたちへのアンケートを実施した。担当教員からは「学校教育の評価とは関係なく、一人一人の想像力を尊重する自由度の高いプログラムが子どもたちの成功体験になった」との声や、その後の英語の授業での集中力が高まったなどの声が寄せられた。また、子どもたちからは、創作や鑑賞によって一人一人違う考えが引き出されることの面白さやその発見を肯定的に捉える反応が多く寄せられ、他者との差異を知り尊重する機会を創出できた。

活動の独自性

アウトリーチは1日完結型の場合も多いが、本プログラムではより深度ある体験をつくるべく複数日にわたる実施を重視した。そのため、企画の段階からアーティストやアートコミュニケーター、自治体職員とミーティングや学区のリサーチを重ね、一貫性のある4段階のプログラムを開発した。また、プログラム実施前に実施校の担当教員との打ち合わせを通じて、各学校の特徴に合わせたプログラム内容に微調整するなど実施先との連動を図った。

本プログラムには、アーティストだけではなく、IMM東京事務局やIMMねいばーずからも海外ルーツを持つスタッフが多数参画した。プログラム内容だけでなく、多様な大人との交流からも日本の多様性に触れられるような体制で実施した。

総括

1年目であった2021年度はひとつのエリアでの実施に留まっていたが、2022年度は区内全域でプログラムを展開することができた。とりわけ、多文化共生に課題を持つエリアの小学校を対象にしたことで、実施先の潜在的なニーズに訴求することができ、複数日にわたる開催が実現した。

本プログラムでは、アーティストの作品を教室内に展示し、その作品を読み解く「対話型鑑賞」と、アーティストとともに展示作品に手を加えていく「アーティスト・ワークショップ」を軸に流れをつくることで、アートに馴染みのない子どもたちもアートを身近なものとして捉えられるよう工夫した。アートを映し鏡にすることで、身近にいるクラスメイトの多様性を知るだけでなく、アーティストや多様な大人との交流を通じてさまざまな生き方に触れる機会になったという好意的な感想が寄せられた。

本プログラムの実施を通じて、多国籍化が進む区内の教育現場からは「多文化とアート」をテーマにした本プログラムへのニーズが高いことが明らかになった。今後も地域課題・教育課題に呼応したプログラム設計をしながらさらなる実施先を開拓していきたい。



教室に展示された作品を鑑賞する子どもたち
 (Send me back home) (2023) Sepideh Hashemi
 撮影: 富田平



アートコミュニケーターによる対話型鑑賞
 撮影: 富田平



身体をつかったプレクチャーの様子

| | | | |
|------|----------------------|-------------|---------------------|
| 事業名 | UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川 | | |
| 団体名 | 特定非営利活動法人クロスメディアしまだ | 実施期間 | 2023年2月23日～3月19日 |
| 代表者名 | 大石 歩真 | 活動地域（都道府県名） | 静岡県 詳細エリア 島田市及び川根本町 |

活動の目的

無人と呼ばれる場所を現代社会の象徴と捉え、アートを手法に行う地域再生の取組で3つの無人をテーマとする。1つめは「地方の無人化」。当該エリアも過疎の進行とともに無人化へ進んでいる。大地を耕し、森を守り、大井川の恵みによって生きる生活様式が成り立たない社会が目前にある。2つめは「都市の無人化」。地方では街中に、全国では大都市に人口が集中し、巨大な情報化により様々な場所が加速度的に無人化している。3つめは「コロナによる無人化」。世界中の至る場所が無人化した。改めて現代社会が忘れていた豊かさの意味や人間の底力を「無人と呼ばれる場所」からアートを道しるべに発信することを目的とする。

活動の内容

当芸術祭は「無人駅がひらくと地域がひらく」をキーコンセプトに地域再生の取組として開催している。地域住民が芸術祭に関わることで地域への誇りの醸成、地域との関わりによる作家の成長を目的とする。テーマを「地方の無人化」「都市の無人化」「コロナによる無人化」の3つの無人とし、芸術祭として3つの無人に挑戦することで地域自身の持つアイデンティティに光を当て、新たな形で掲げる希望の道しるべとなることを目指す。

作家による作品制作を住民との関わりの中で実施し芸術祭にて発表。集落の人々の日々の生活の中にある五感をアーティスト達の表現によってアート作品に変容、昇華させていくような多彩な表現が可能となるアーティスト構成とした。また、同時連動企画として住民が地域の文化・芸術活動へ主体的に参加していく枠組みであり住民を参加者から主催者へ変容させていくための市民文化祭という位置づけの「アートプラット／大井川」を開催しアートによる地域づくりに邁進する。

参加作家、参加人数

参加作家／上野雄次、内田慎之介、形狩りの衆、木村健世、さとうりさ、関口恒男、TAKAGIKAORU、ヒデミニシダ、ふじたともこ、丸山純子、森繁哉、歪んだ椅子、カ五山 計13組・21作品。

アートプラット／大井川

41プログラムの実施(公式7、市民企画34)

他機関との連携状況

アーツカウンシルしずおか、島田市をはじめ、大井川鉄道(株)は駅舎等での作品設置。女子美術大学ヒーリング表現領域研究ゼミでは単位取得講座として作品プラン創出及び制作発表を行った。また島田市及び川根本町内の30を超える団体及び企業と連携して開催した。

活動の効果

昨年の台風15号により、鉄道が不通、国道も通行止めというアクセスの悪さを、JR島田駅周辺の「まちなかエリア」を新たに設置し週末ごとにツアーを行う形に対応した。全国各地より来場者があり、約3万人の来場があった。韓国、台湾といったアジアからの来場者も少しずつ増加している。

地域内での関わりしるも年々濃密になっており、毎週遠方から参加するコサポーターの出現と、そういう人材との地域の会期を超えた関わりが生まれている。(詳細は別紙開催報告書参照)

活動の独自性

芸術祭の開催の目的を、「アートを手法に地域を耕し、地域の人が輝く地域づくり」とし、これまでひらいておらず、行政視点からも「お荷物的」とも言える「地域の内側」にスポットを当て、としている。このことが、開催を重ねるごとに来訪者にも認知され、アート作品とともに、地域の人に会い、交流することを喜びとして価値あるものとする来場者が増えている。地域の70代の人達を「妖精たち」と呼び、交流できるとうれしい。という動きになりはじめていることは当取組の独自性ではないかと考える。

誰も登ることのなかった山がアート回廊として作品が点在するルートが整備されていったり、耕作放棄されていた茶畑がアーティストによりキャンパスに生まれ変わるなど、会期を超えたアーティストとの協働の取組が多数生まれはじめている。

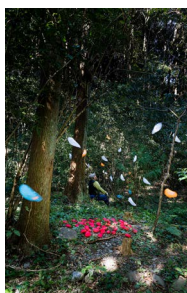
総括

6回展となる今回は13組の作家により合計21作品を制作展示し、各イベントプログラム等を開催した。会期中は全国各地に加え台湾や韓国といったアジア各国からも多くの来場者があった。

今回は新たな取組として、JR島田駅周辺を「まちなかエリア」と設定し中心市街地と中山間地域を連結させるプロジェクトや、抜里エリアに「アート回廊」を整備した。

芸術祭主要エリアである抜里エリアでは通年で「アート回廊プロジェクト」を立ち上げ、ハイキングルートの整備と作品設置を行った。「アート回廊」により、住民しか知らなかった絶景がひらいた。作品は会期後も地域と共に管理していく。

今回も多くのサポーターや住民に協力をいただいた。特に抜里エコポリス及び抜里町内会の多大な協力は、欠くことのできない芸術祭を動かす重要なエンジンとなっている。作品の根幹となる土台や基礎作り、下準備を制作チームとして進める姿や、会期を通じた作家や来訪者との関わりには感動をおぼえる。このような様々な交流や変化が、地域自体の受け皿が大きくなっていく化学反応とも言える。無人駅では芸術祭の会期を越えて、アートが少しずつ地域の日常に染み出している。日々の中に小さくとも光を見出して笑顔が増えるような地域づくりを今後もアート、芸術祭を軸に行っていきたい。



メインビジュアル
さとうりさ／くぐりこぼち



寺山(通称ぼいんぼいん山)山頂
ヒデミニシダ／境界の遊び場Ⅳ音の要素



森繁哉／一か所の芸術ひとりひとりの芸術

| | | | |
|------|-------------------------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | MAT, Nagoya 2022 地域交流プログラム | | |
| 団体名 | Minatomachi Art Table, Nagoya | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 吉田 有里 | 活動地域(都道府県名) | 愛知県 詳細エリア 名古屋市港区名港 |

活動の目的

Minatomachi Art Table, Nagoya(以下、MAT, Nagoya)は、2015年より名古屋港エリアを舞台に、まちづくり団体との協働によってアートプログラムの活動を行っている。現代アートの展覧会、レジデンス、スクール、ワークショップなど地域との交流を目的とした様々な企画を提供している。東海エリアには、芸術、建築、デザインを学ぶ大学が数多くある。アート、建築、デザイン、音楽など、分野を超えた表現者たちの交流が生まれる場をつくり、港まちなかの住人、働く人、訪れる人と様々な世代が表現者と交流しながら、アートがテーブル(媒介)となる活動を実施している。

活動の内容

地域の課題となっている問題に向き合い、3つのプロジェクトを実施した。

- 1 アーティスト長島有里枝による「ケアの学校」を行った。社会で周縁化される人びとや事象をテーマに制作する長島が、会場を自身のスタジオとして公開。来場者と対話や交流を重ねながら「ケア」について考え、小さな物語が数々生まれた。
- 2 スタジオプロジェクトでは、ミュージシャンのICHIを招聘し、滞在制作、ワークショップ、ライブなどの活動を行った。滞在中にまちの中で拾い集めた不用品や廃材で大型演奏装置を作成した。
- 3 「みなとまち空き家プロジェクト」では、建築を学ぶ有志の学生が、職人監修のもと、空き家をアーティストのスタジオとして改修した。

参加作家、参加人数

参加作家/長島有里枝(アーティスト)、宮田明日鹿(アーティスト)、ICHI(アーティスト)、港まち手芸部、みなとまち空き家プロジェクト ほか
年間来場者総数/20,870名(述べ人数)

他機関との連携状況

港まちづくり協議会、アッセンブリッジ・ナゴヤ、みなとまちこども食堂、トワイライトスクール(学童保育)、まちの社交場「NUCO」、10代の子どもの居場所「パルス」と連携した。愛知県内の芸術系大学、アートセンター、芸術祭などの団体と連携し、広報協力、技術協力などを行った。

活動の効果

「ケアの学校」をきっかけに、長島さんの表現媒体である写真、小説、フェミニズムなどのキーワードによって、アーティスト、地域の団体、プロジェクト、人々をゆるやかに結びつけ、自主的な活動の場や居場所が生まれた。若手作家によるフェミニズム読書会、みなとまちこども食堂、10代の居場所「パルス」、港まち手芸部、トワイライトスクール(学童保育)へのアーティスト派遣などの活動が相互に連携しながら今後も継続していく予定。

活動の独自性

まちづくり団体と協働して実施しているプロジェクトながら「アートそのものは、まちを変えるためには存在していない。アートの本質は、既存の価値観にとらわれる事なく、独自の視点で物事に向き合い、新たな意味や存在意義を問い続ける事だ」というステイトメントを掲げている。アーティストがまちを訪れ、関わる事でこれまで見えなかった風景や問題・課題に気づき、それらをまちが受けとめる事で、異なる価値観や他者を受け入れてきた港まちなかの、地域の多様性がさらに広がることを期待している。MAT, Nagoya は、テーブルという言葉が多様な意味をもつように、このまちの中でさまざまな意義や表現を持った媒体として活動を行っている。

総括

活動を始動してからの約8年間で社会におけるアートの役割も大きく変化していった。近年は、アーティストと共にまちと深く関わるリサーチを行い、個人的な事象だけでなく、社会的構造によって引き起こされる問題や課題にまで気づきをもたらすプロジェクトへと移行していった。長島有里枝「ケアの学校」では、さまざまな事情で生きづらさを抱える人たちと共に問題を考える場をつくった。港湾エリアは、外国籍の住人も多く、少子高齢化した地域とのコミュニケーションの難しさなどの課題を抱えている。今回のプロジェクトを契機に地域の子供達を支援する「子ども食堂」との連携や学童保育へのアーティスト派遣事業などが始動した。単年度のプログラムや一過性の芸術祭では実現が難しい、人と町との関係の構築を継続しながら、今後もアーティストとのリサーチベースのプロジェクトを計画している。アーティストにとっては、滞在制作によって新たな表現やアイデアが生まれ、その作品が芸術祭への参加、美術館の作品収蔵などの成果へと広がりが出ている。制作に寄り添い、種まきを続けることで、育つ人やモノや事があると体感している。



長島有里枝「ケアの学校」展示室の様子



ICHI ワークショップの様子



空き家プロジェクト 改修の様子

| | | | |
|------|----------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | 高見島プロジェクト 2022 | | |
| 団体名 | 高見島プロジェクト | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 内田 晴之 | 活動地域(都道府県名) | 香川県 詳細エリア 多度津町高見島 |

活動の目的

高見島を1つの美術館として捉え、人々が集まりゆったりと芸術を楽しむ場に、同時に島の伝統的な家屋や景観を保存することが、このプロジェクトの目的である。現在、島民の数は減少し空き家が崩壊し続けている。現状維持のためにも、ここ数年のうちに手を打つ必要があると考えている。今後も修理した空き家を作品展示会場として使い、新たな場作りを行う。高見島の住民の方々、そして多度津町、ボランティアの方たちと協力しながら、人が集う場所を継続的に作っていくことが当面の目標となる。

活動の内容

「瀬戸内国際芸術祭2022」では継続作品5点に加え、新作7点を空き地や空き家で展開、島全体を使って作品を公開した。昨年度に行った空き家修理作業があったからこそ、新たな空き家で新作を公開することができた。鑑賞者は島に点在する作品を鑑賞し、同時に島の景色も楽しんでいた。2013年からの活動の積み重ねから、多くのリピーターの存在も実感している。今年には新たに「TAKAMIJIMA INSIDE GALLERY」をオープンし、これまで島に関わった24名の作家の作品や記録冊子などを販売した。

参加作家、参加人数

2022年は11名の作家が芸術祭に出品し、加えてこれまで島に関わってきた作家24名も「TAKAMIJIMA INSIDE GALLERY」に出品する形で参加している。「高見島プロジェクト」は、多度津町、多度津高校、地域のボランティア、芸術祭サポーター、島民の皆様の協力のもと、活動を行なっている。

他機関との連携状況

高見島の島民の皆様、多度津町、香川県、多度津高校、地域のボランティア、さざえ隊、京都精華大学、アートフロントギャラリー

活動の効果

昨年度手を加えた空き家4件を整備し、「瀬戸内国際芸術祭2022」の会場として保存し、新作とともに公開することができた。前年度から展示会場として使用している空き家のメンテナンスも行えた。新たにオープンした「TAKAMIJIMA INSIDE GALLERY」では、多くの来場者からショップの可能性が見え、売り上げからも今後の継続的な島での活動を行ううえでの足がかりを作れたと言える。

活動の独自性

「高見島プロジェクト」は2013年から4回の芸術祭に参加し、これまで合計9件の空き家を整備し展示会場としてメンテナンスしている。それを可能にしているのは、近隣に住むボランティアの人々や多度津町による日々の支え、環境整備があるからである。また、ほかの島と比べて芸術祭では空き家を使用した新作が多いのも独自の傾向であり、それが高見島を訪れるリピーターの増加に繋がっていると思われる。ショップができたことで、芸術祭期間以外での活動の可能性が広がったとともに、これまで島に関わった多くの作家との新たな協働も期待できる。

総括

高見島は芸術祭に関わる島の中でも最も過疎化の進む地域であり、島民の数も年々減っているのが現状である。その中で9件の空き家を展示会場として整備し1件の空き家を宿舎としてメンテナンスしながら管理している。新たにオープンした「TAKAMIJIMA INSIDE GALLERY」では地域の方々、参加アーティストにもギャラリストとして働いていただいた。ここでは地域の方々、鑑賞者と我々アーティストとの多くのコミュニケーションが生まれ、プロジェクトの取り組みに賛同の意見を多くいただいた。私たちアーティストにとって、この場で地域の方々、鑑賞者の生の声を聞けたことはとても貴重な経験であった。島には依然崩壊が進む空き家があることは無視できないものの、芸術祭期間以外にも人が訪れる場所を目指すという、「高見島プロジェクト」の基盤が整い始めたと言える。今後も、マネジメント人材を公募で募集するなど運営方法を見直しながら、プロジェクト参加者が安心して活動できる環境づくりを進めていきたい。地域住民、多度津町、そして大学機関との連携を深め、意見交換、目的共有を大切に、継続的なプロジェクトを目指す。



空き家での作品制作風景



2019年に修繕した屋根が再び崩れたため、2022年に改めて修復している様子。



新しくオープンした「TAKAMIJIMA INSIDE GALLERY」内部。写真 木田光重

公益財団法人 福武財団

地域振興助成
2022年度瀬戸内海地域振興助成
成果報告書

Fukutake Foundation

| | | | |
|------|---------------------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | 地域を知り、地域に誇りをもつ「ジオクルーズ」の開発 | | |
| 団体名 | 讃岐ジオパーク構想推進準備委員会 | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 長谷川 修一 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 詳細エリア 香川県全域 |

活動の目的

香川県は国立公園の瀬戸内海、奇跡の火山活動によって形成されたサヌカイト等の火山岩類の世界的な学術研究、火山岩類が侵食されて形づくられた残丘が織りなす讃岐平野と備讃瀬戸の造形美および里山や島の岩石を利用した多様な石の文化と世界的価値が多くある。これらの魅力の知名度を向上させる取り組みとして、交通の要所であった瀬戸内海に脚光を当て、海から見える地形・地質・景観を、プラタモリ風なお題に沿って説明するガイド法を開発し、その土地の物語を伝えていく新しい形のツアーを提案する。

活動の経過

- 東讃(馬篠港～馬ヶ鼻)ジオクルーズ
 - 4月19日 クルーズ下見
 - 5月 1日 馬ヶ鼻現地調査による地質の確認
 - 7月 9日 クルーズリハーサル
 - 9月30日 モニタークルーズ
- 荘内半島(三豊市)ジオクルーズ
 - 7月 2日 クルーズ下見
 - 7月10日 クルーズリハーサル
 - 9月 9日 モニタークルーズ
- ジオツーリズムによる地域活性化シンポジウム
 - 1 日時/2月15日 参加申込者/167名(録画配信と併用)
 - 2 内容
 - 活動報告「ジオツーリズムによる香川県の魅力発信」
長谷川 修一(讃岐ジオパーク構想推進準備委員会委員長)
 - 基調講演「ジオグルメ」で牽引するせとうち讃岐ジオツーリズム
巽 好幸 氏(ジオリブ研究所長・神戸大学名誉教授)
 - パネルディスカッション
ジオツーリズムを活用した地域のブランド化について
 - 3 福武財団助成
 - パネルディスカッションコメンテーターに内田 真一 氏
(公益財団法人 福武財団助成部門セクションリーダー)登壇
 - 助成でシンポジウム冊子、展示用ポスター作成

活動の成果

2022年度は、東讃(馬篠港～馬ヶ鼻)、荘内半島(三豊市)でジオクルーズを行った。

- 東讃(馬篠港～馬ヶ鼻)ジオクルーズ
 - お題は「なぜ津田湾に海から見た絶景が広がるのか?」
 - 東かがわ市上村一郎市長、さぬき市中村修副市長をはじめ、地域おこし協力隊、旅行会社等と当委員会を含め15名が参加。
 - アンケートでは「宿泊を含めた2市の連携事業にするとおもしろい」「コーヒープレイクを挟むと商品価値が高まる」との評価をいただいた。
- 荘内半島(三豊市)ジオクルーズ
 - お題は「なぜ荘内半島沖に絶景が広がるのか?」
 - 三豊市産業政策課、アウトドア会社、旅行会社等と当委員会を含め7名が参加。
 - アンケートでは、「ワクワクさせる仕組みを取り入れるとおもしろい」「往路はジオクルーズ、復路はサンセットクルーズにするメリハリがでる」「教育旅行としても使える」との評価をいただいた。
- シンポジウム
 - 活動報告では委員長が、助成で行った2つのクルーズ事例と、ジオと食、サンセット、陸上のジオサイト探訪を組み合わせていることが望ましいと報告した。
 - パネルディスカッションでは、内田真一氏が、ジオはツーリズムだけではなく教育、防災にも使っていけると思うとコメントした。
 - 録画配信のシンポジウムのURL
<https://www.youtube.com/watch?v=kiQrq40nkV8>

今後の課題と展望

今回の取り組みで、ジオクルーズを商品化するには、クルーズだけではなく、ジオクルーズと食等の楽しみを付加したツアーを考えることが望ましいことが分かった。また、ツアーの実施事業者の開拓と商品化に向けた連携体制の構築も課題である。

2023年度は、廃止された坂出港～下津井港の航路に着目し、地域の方たちとも連携した島めぐりジオクルーズを通して、かつての船便が担った役割について考えていきたい。



荘内半島ジオクルーズ
報道機関による取材



馬篠港～馬ヶ鼻ジオクルーズ
意見交換会



ジオツーリズムによる地域活性化シンポジウム
シンポジウム状況とポスター展示

| | | | |
|------|-----------|-------------------------------|----------------------|
| 事業名 | | 古民家転生：塩江の生きたアーカイブを体験できる宿泊施設事業 | |
| 団体名 | 一般社団法人トピカ | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 村山 淳 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 詳細エリア 高松市塩江町 |

活動の目的

塩江町は、讃岐山脈の北側に位置し、徳島と香川の交通の要衝、宿場町として古くから栄えた町である。「宿泊できる歴史資料館」である「いにしによる」は、その特色ある文化を色濃く反映しながらも、地域住民が受け継いできた日常生活史を展示し、体験してもらうために整備を行っている。整備にあたっては、文化人類学者の服部志帆氏を招聘し、学術的な知見によるアーカイブの知的強度を高める。また美術家の小野環氏、横谷奈歩氏に参加してもらうことで、アーティストのアイデアと技術による地域史の直観的な理解を実現することを目標としている。この施設と活動を通して、奥深い塩江の社会的側面に気軽に興味を持ってもらうとともに、塩江に対するより深い理解を促進する。また、来訪者それぞれの地域に眠る歴史の様々な側面を知る気付きを得てもらうことも目的としている。

活動の経過

2020年から調査と作業を行ってきた「いにしによる」の作業を2022年度も継続して行った。作業としては、4月からアーカイブの分類と記録作業を行った。夏季も定期的に有識者が来訪し、全832点のアーカイブを記録、分類した。これを受けて9月に「入魂ワークショップ」と称して掃除を行った。年度末の時点で2階の宿泊と床下アーカイブ展示スペースに関してはほぼ完成し、既に完成していた水回り部分と合わせて、ゲストハウスとして必須の機能は大体が完成した。一方で、後述する展覧会事業実施のため、当初予定していた記録済みアーカイブを「いにしによる」に展示する作業は行わず、来年度以降の課題とした。

大きな事業として、当初の事業計画にはなかったものの、香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館との共同開催での展覧会開催の相談が本事業に関してあり、2022年4月から本格的に調整が進んだ。有識者を交えた展示計画の作成や展示内容の作成を行い、同10月には「いにしによる一断片たちの囁きに、耳を」と題して、瀬戸内海歴史民俗資料館瀬戸内アーカイブにて企画展を開催し、途中アーティストトークなども挟みながら12月18日まで展示を行った。この展示にあわせて、「いにしによる」本体も一般開放を行った。

活動にあたっては、地域住民と有識者の交流も重視し、来訪の度に食事会や地域住民の暮らしを体験するささやかな会を設けるなどして、有識者の地域理解と住民の活動への理解を促進した。

活動の成果

2022年度の活動の成果は大きく2つに区分される。ひとつ目は、塩江町にある「いにしによる」の施設そのものの作業の進捗である。2022年3月の時点で構造は出来ていたものの、アーカイブの整理が間に合っておらず、展示物の配置も完了していなかった。2022年度はアーカイブの整理が進んだことで2階部分は一般開放と見学に堪える形となった。

ふたつ目は、「いにしによる一断片たちの囁きに、耳を」展の開催である。施設本体の作業途中での開催ということで、予定外の作業が大幅に増えたものの、展示の形と期限が明確にされたことで結果として施設本体に寄与する形で作業を進めることができた。具体的には、アーカイブのモノと調査の過程で明らかになったストーリーを紐付け、カードに記載する作業や、展示スペースにどのように配置するかを考えることで結果的にモノの属性をチームで検討する機会を得たことは貴重な成果で、今後のアーカイブ展示に大きく寄与する知見を得た。

地域への効果として、地元住民がそれまで廃棄物として認識しがちであった、使わなくなった生活雑貨や、家に眠る昔の書類・写真などの記録を「地域の歴史を示すアーカイブ」として認識しはじめてくれたことを第一に挙げたい。また、服部氏の丁寧で、専門的な調査により家族でも認識できていなかった家の歴史と地域への接続が明らかになり、生活史や家族史が地域の大きな歴史に劣らず大切なものであるということを実際に住民に対して示すことができた。

美術家の小野氏、横谷氏の今年度の作業と展示に際して作成していただいた作品群には、調査の成果やこれまでの作業と地元住民との交流で得たイメージをインスタレーションや立体、映像や音声作品など様々な媒体を通して表現していただくことで、地元住民のみならず、展示を観覧した方々にプロジェクトの意味と面白さを伝える力があつた。実際、様々な属性の方から直接、間接的にフィードバックをいただいた。

今後の課題と展望

まずもって、施設の恒常的な一般開放と宿泊も含めた利用に向けて、2023年度は引き続き必要な工事と作業を進めることが今後の課題となる。また、収集したアーカイブの全てを展示するスペースが施設にないため、今後どのような形でアーカイブを帰属させていくかも大きな課題となる。

また、「いにしによる」の位置する塩江町上西地区では段々と認知度があがってきた本プロジェクトではあるが、他の塩江・安原地区ではまだ十分に理解されているとは言えない部分があり、町内向けの報告会や広報を重点的に行うことを予定している。地域住民の理解を得ながら、塩江町の内と外、過去と現在の交流拠点として機能する施設に仕上げていきたい。



入魂ワークショップ(お掃除ワークショップ)の様子



地域住民を招いての展覧会見学



「いにしによる」床下アーカイブ

| | | | |
|------|---|-------------|----------------------|
| 事業名 | 神社を拠点とした古き良き風習と共に育てる地域コミュニティきずな構築プロジェクト | | |
| 団体名 | 小豆島夏詣運営委員会 | 実施期間 | 2022年4月1日～2022年8月31日 |
| 代表者名 | 大和 美祈 | 活動地域(都道府県名) | 香川県 詳細エリア 小豆島町・土庄町 |

活動の目的

小豆島は、神社と地域行事が密接に関わっているエリアで、太鼓祭りや農村歌舞伎等、地域コミュニティの維持に神社の存在が不可欠であると考えられている。昨今、コロナ禍により軒並み行事が中止となり島民も神社を訪れる機会が減少している。

本プロジェクトでは、「夏詣」という新しい日本の風習を取り入れ、地域住民や観光客が神社に足を運ぶ機会を作り、神社と地域との繋がりを感じられる場を創出している。

小豆島における神社は、人生の節目に訪れる場所としての役割や、住民はもとより島を離れた人にとっても拠り所として存在している。神社を地域コミュニティを育む拠点として活動を行うことが地域住民の誇りやコロナ禍で薄れつつある連帯感を呼び戻すことに繋がると考えている。

With/Afterコロナの観点でコロナ前の繋がりを復活し、更に新しい層がプロジェクトに関わることで、古き良き風習の継承・継続を推進している。

活動の経過

●茅の輪づくり

元々地域にある茅の葉を材料として茅の輪を制作した。支援が必要な神社に対してはサポートをしながら今後は自走出来る仕組みを模索。茅の輪が出来たことで夏越の祓などの神事も執り行われ、小豆島の新しい夏の風物詩を作ることが出来た。

●あんどんまつり

小豆島、豊島の小学生が島々にまつわるメッセージや絵を牛乳パックに描き「SDGsあんどん」を制作した。神社の境内に飾り、家族で初夏の夏を楽しめる催しとして開催。

あんどんづくりではSDGsの目標4,7,11,17の学びに繋がった。また運営主体となる小豆島町青年団をはじめ、行政、教育機関、商工会青年部、交通関係事業者、観光関連団体にもご協力いただき、子ども達の感性と共に新しい風景を実現することが出来た。設営では各社の氏子の方々にもサポートいただきながら約650個のあんどんを取り付けた。

●大祓詞のワークショップ

神道に対して理解を深めるため、夏越の祓で奏上する大祓詞の解説や練習会を開催。

●御朱印

夏詣限定御朱印のPRを促すポスターをフェリー内や観光施設などに設置した。

活動の成果

●神社を彩るあんどん作りのワークショップは、SDGsの教育の一環で小豆島町・土庄町の学校の授業として、または自由学習として小学生が制作。

町の魅力を考え魅力を周りに伝えること、SDGsあんどんにはプラスチックを使用しないこと、照明の一部に再生エネルギーを活用すること、目的達成のために、地域全体で一緒に取り組むこと等、SDGs目標4,7,11,17に繋がり、実際に行動しながら学べる体験提供が実現し、約650名の子どもたちが参加した。

●当日のイベントは境内のライトアップを開催した。土庄八幡神社、内海八幡神社で各社3日間開催し、約1,000名の来場者が訪れた。コロナ禍によりお祭りの中止などが続き、神社へ詣でる機会が少なくなった子どもを中心としたファミリー層が会場に多く訪れ、神社を拠点に地域コミュニティを育むことが出来た。

●行政関係や教育機関にも協力依頼をし小豆島町・土庄町の共同での取り組みとなった。またメインの運営は小豆島町青年団が積極的に実施し、運営サポートとして両町の商工会青年部、若手の氏子の方々からの協力体制も得られた。その他、今後小豆島の夏の観光コンテンツに磨き上げていくことを見込み、観光協会、バス会社、フェリー会社、タクシー会社からも後援が付き、ポスター等も様々な場所で飾っていただいた。

●茅の輪に関しては、材料の茅の葉を定期的に刈る為、廃棄されるはずの自然の物を活かして、古き良き風習の復元に成功し、家族で茅の輪づくりをする様子も見受けられた。

●あんどんまつりは視覚的にも楽しめる催しだったので個人のSNSでも多く発信されていた。また会場の様子が四国新聞等にも取り上げられた。

●島外からの観光客に対して、小豆島限定御朱印帳を頒布し7社の神社を巡ることで島内全体の神社活性化を促進し、授与者によるSNS投稿で小豆島夏詣の認知を高めた。各社をバスや自転車で巡る観光客も見受けられた。

今後の課題と展望

広域に渡る複数箇所での取り組みとなる為、人手が必要となる。本年度は子ども達がSDGsあんどんの作成、大人が飾り付けやイベント運営、広報の役割分担をしたが、人手不足で一人あたりの負担が大きかった。地域住民による演奏や踊り、イベントにまつわる作品展示等も取り入れ、大人も主役となるプロジェクト当事者を増やしたい。また島の人口減少と共にお祭りに関わる人手も不足することが予想されるため、体験プログラムを造成し、神社を通じたコミュニティを構築することで関係人口創出を促進するきっかけを作る。外国人観光客に対しても多言語化したパンフレットを制作し参加者の幅を広げ、より多くの方々に瀬戸内の神社の魅力を発信し認知を高める。



小豆島あんどんまつり期間中の境内の様子



小学生が制作した SDGs あんどん一部



茅の輪づくり
(伝法川沿いで茅の葉を収穫し活用)

| | | | |
|------|--|-------------|----------------------|
| 事業名 | 瀬戸内海の離島集落における「生きた景観づくり」～空き家の活用と男木島らしい景観継承に向けた情報分析と発信 | | |
| 団体名 | 安部良アトリエ級建築士事務所 | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 安部 良 | 活動地域(都道府県名) | 香川県 詳細エリア 高松市男木島 |

活動の目的

島史の存在しない男木島では、島の歴史や風土は集落景観によって継承されており、その景観を構成している男木島特有の家屋建築の存続が重要である。また、近年は移住者によって住み替えられる家屋が増えてきていることから、個々のライフスタイルに応じた改修や用途変更を受容しつつ、男木島特有の景観や風土を継承する「生きた景観づくり」が求められていると考える。そうした景観づくりを通じ、コミュニティの存続を支援することが私たちのミッションである。

そのため、集落景観の特徴・伝統的家屋の成り立ち・集落の変化と移住の動向などに関する知見を島内へと還元し、地域の魅力の向上や、コミュニティと景観の持続に貢献することを活動の目的とする。

活動の経過

2022年度の活動は主に下記の活動を行ってきた。

- 1) 空き家リノベーションDIYワークショップ・勉強会
- 2) 雑木林での子どもたちとの環境ワークショップ
- 3) 知識・情報の可視化や資料アーカイブに向けた準備

1)のDIYワークショップ(WS)では、男木島移住者による空き家活用に際し、自主施工で可能な改修方法を検討し実際にWSで改修を行ったほか、他の島民を巻き込んだプロセスで、DIYスキルの普及にも取り組んだ。

2)の環境ワークショップでは、「男木島、みらいの教育プロジェクト」との協働が実現し、男木島の子どもたちと、島内の荒神林(コジバシ)と呼ばれる雑木林でのWSやレクチャーを実施。WSと並行し、荒神林の中に残る旧・保育所の建物を島民みずから修繕し、島内の新しい拠点とする準備が始まった。

3)では、これまでの研究内容を可視化し、島内へと還元するための情報整理や冊子発行に向け、アンケート調査や資料編集等の準備を進めてきた。また、島民が保管している写真や、男木島に関する資料のアーカイブに向けた情報収集とディスカッションを行ったほか、近隣離島である豊島での調査や打ち合わせも行い、男木島との比較データを収集しながら、島間の交流や協働に向けた準備も行った。

2022年度は上記の活動と並行して、代表・安部の博士研究として、10年以上続けてきた男木島集落での調査・研究・活動をもとに学術論文をまとめ、日本建築学会への論文投稿を行うなど、知見の整理や一般化に注力した。

活動の成果

- 1 空き家リノベーションDIYワークショップ・勉強会
WSと勉強会を通じ、空き家改修の方法やスキルの向上・共有を行うことができた。具体的には、屋根瓦の改修方法(瓦を下ろす、防水処理、瓦の葺き直し)や、土壁の補修と土の再利用、コンクリート土間による建物の耐震補強などが挙げられる。また、比較的簡単な壁の塗装作業などは、プロ세스を外部にひらくことで、島内の子どもたちが参加する交流の場ともなった。
また、2022年度の活動を通じ、空き家リノベーションや空き家の利活用に協力的な島民や島外の協力者などを発掘・育成できていると感じており、空き家改修のための協力体制やネットワークが確立しつつあることも、活動のひとつの成果であると考えている。
- 2 雑木林での子どもたちとの環境ワークショップ
男木島小中学校の保護者が中心となって活動している「男木島、みらいの教育プロジェクト」との協働で、荒神林の草刈りや道づくりに協力した。現地WSのほか、安部アトリエからは荒神林の生態系や植生、集落景観との関わりや里山環境整備についてのレクチャーなども行った。
子育て世代の移住者らを中心に、島民側の主体的な活動が萌芽しており、私たちの知見を活かしてもらいながら、今後のさらなる展開を期待できる。
- 3 知識・情報の可視化や資料アーカイブに向けた準備
安部アトリエが男木島集落での研究や活動を始めて10年以上が経ち、さらに2022年度は学会論文の投稿や博士研究なども行ってきたが、資料や情報の整理にはさらなる時間と作業を要する。また、かねてより課題としており、コロナ禍において中断していた、島民所有の写真や資料のアーカイブ化に向けた取り組みを再開すべく、参考事例の調査や、最新のデジタルアーカイブ手法に関するヒアリングを行った。それらの内容を島民と共有

今後の課題と展望

私たちの研究や活動内容は、2028年ごろを目処に活動成果の多くを島内へと還元し、島内の自治活動や、島民中心の空き家利活用・景観保全団体へと役割を委譲させていくことを目指している。2022年度は、島民や移住者側の主体的な活動やネットワークが構築されつつあることが確認でき、その一歩を踏み出せたことを実感している。

一方で、「生きた景観づくり」のための住宅整備方法のマニュアル化や、空き家管理・整備・移住相談と「生きた景観づくり」をリンクさせた活動母体の立ち上げとシステム化については、多くの作業を要することからも、検討・準備段階に留まっており、今後具体的に取り組んでいかなければならないと考えている。



男木島の古民家での瓦屋根修繕 WSの様子



男木島古民家での壁塗り WSの様子



里山環境整備に向けたレクチャーの様子

| | | | |
|------|------------------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | 道西喜代吉氏画集展覧会 | | |
| 団体名 | 真鍋島公民館自主講座(真鍋島歴史文化研究会) | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 武井 優薫 | 活動地域(都道府県名) | 岡山県 詳細エリア 笠岡市真鍋島 |

活動の目的

明治期から昭和期にかけての真鍋島を生きた船大工、道西喜代吉氏。その半生において、氏は島に関する一連の記録絵画集を描き遺した。細密な筆致で描かれた味のある画風、人物の息づかいをも感じ取れるような血の通った表現は、市井の芸術作品としての価値を存分に高めている。また、当時の真鍋島の生活風景や歴史の一場面などが克明に活写され、詳述されており、第一級の貴重な民俗資料ともなっている。

しかし現在、真鍋島内における「道西喜代吉氏画集」の認知度は決して高いとは言えない。そこで、当該画集を広く地域住民に周知し、その価値をコミュニティ内で共有するため、真鍋島歴史文化研究会を中心に慎ましやかな展覧会を企画した。

活動の経過

真鍋島公民館からの依頼で、道西喜代吉氏の親族が散逸していた画集の一部を収集。笠岡市教育委員会が真鍋島内の明鏡山圓福寺所蔵原画とあわせて電子化・パネル化した。真鍋島歴史文化研究会としては、笠岡市から提供された4組の画帖(それぞれ33頁、20頁、30頁、26頁)のデジタルデータを所有している。

展覧会開催に向けての準備過程では、現地踏査や地域住民からの聞き取りなど、作品の意味内容に関するフィールドワークを重視した。特に作品に描かれている場面の同定には、文献リサーチや座談会といった手法も適宜組み合わせながら多くの時間を割いた。

他団体との協働にも力を入れた。岡山商科大学経営学部のゼミには、展覧会についてのアイデア出しから会場設営、会期中の補助に至るまで多岐にわたるお力添えをいただいた。また、真鍋小・中学校とも連携し、島の子どもたちが本プロジェクトに参画。笠岡市地域学校協働活動の一環として郷土史・郷土文化ワークショップをおこない、会期中には手作りの「真鍋島おすすめスポットマップ」と42年の伝統を誇る「版画ふるさとカレンダー」をサブ展示した。

活動の成果

2022年10月、延べ14日間にわたり真鍋島内2箇所の会場にて「道西喜代吉氏画集展覧会」を開催した。

真鍋島歴史文化研究会が把握している総数60点以上にのぼる道西氏の作品は、描かれている主題から「生活・日常」、「地理・建造物」、「祭り・行事」、「歴史・伝承・伝説・言い伝え・語り」の4カテゴリーに便宜的に分類できる。その中から25作品を厳選し、各画が表す場面の現在の様子を切り取った写真とともに、「真鍋島の過去と現在の対比」というテーマで公開展示した。また、地域住民有志による協力のもと、会期中の3日間で島の郷土料理を来場者に無料提供した。

本展の総来場者数は365人。その内訳は真鍋島住民142人、笠岡市内(真鍋島を除く)から69人、岡山県内(笠岡市を除く)から81人、他都道府県から73人であった。会期前の準備段階から会期中を通して新聞やTVなどの各種メディアに取り上げられ、会期後も学会や市民イベントで「道西喜代吉氏画集」についての発表をおこなうなど、精力的かつ丁寧に情報発信に取り組んでいる。

各方面より道西氏の画集に関する示唆的な知見が多数寄せられ、学術的にも重要な情報が蓄積した。そして本プロジェクトの総括たる『真鍋島のみた記憶 道西喜代吉氏画集展覧会 活動アーカイブ』の発刊に至った。

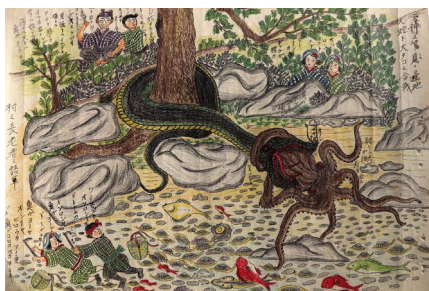
本活動を通じて実感したのは、真鍋島の人たちの「道西喜代吉氏画集」に対する関心の高さである。それはひいては郷土愛とも呼べるものであり、島民に質問を投げかけると皆さん嬉々として往時の暮らしぶりを話して聞かせてくれた。そして井戸端会議よろしく会話が流転し、時間も忘れて昔話が華が咲く。そうしたコミュニケーションの環の醸成、「ふれあい」こそが本活動の意義であると感じる。

今後の課題と展望

本プロジェクトを基点として、今後は次の各事項に取り組んでいきたい。

- 「道西喜代吉氏画集」の学術的な追究
- 「道西喜代吉氏画集」の持つ文化財としての価値の深化
- 「道西喜代吉氏画集」の観光分野への応用

日本全国の他の過疎地域同様、ここ真鍋島でも急速に高齢化が進行している。地域内における社会的紐帯を維持することが年々難しくなっている。私たちの取り組みが、失われつつある「皆が集い語り合える場」を再創造する端緒となることを期待する。



道西氏の作品「大蛇ト大タコ之合戦」
真鍋島歴史文化研究会



展覧会会期中の様子(本浦会場)



地元有志による郷土料理の調理風景

| | | | |
|------|----------------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | 小林和作旧居再起動計画+ | | |
| 団体名 | NPO 法人 尾道空き家再生プロジェクト | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 豊田 雅子 | 活動地域(都道府県名) | 広島県 尾道市 |

活動の目的

地域にとって重要な文化的な背景を持ち、かつ優れた木造建築である小林和作旧居の持つ問題点を解消し、再生と活用を通じて、次世代への継承が活動の目的である。また、没後50年近く経ち、記憶が薄れゆく画家・小林和作についての記憶や戦後の文化活動のあり方に新たに光を当て、家の来歴・価値をしっかりと再認識すると同時に、これまであまり注目されてこなかった出雲街道に面した長江エリアの魅力を再発見し、発信する機会を作る。小林和作旧居を次の担い手に適切に継承するため、様々な実験的仮活用を通じてガイドラインを案出し、運営体制を構築する。また、和作旧居だけでなく地域にも視野を広げ、尾道市内で解体の危機や継承の困難に直面している建築の保全に関するアドバイスや適切な改修工事によって危機から救い、次世代へと継承する「尾道瀬戸際建築不動産」事業の開始準備を行う。

活動の経過

- 和作旧居の建築調査をもとに作図と所見をまとめ、登録有形文化財申請準備を行った。
- 毎月和作研究会を開催し、和作旧居が抱える課題と和作をめぐる尾道の文化や芸術についての話題を共有する機会とし、その成果を和作ウィークで発表した。
- 環境整備を定期的に継続。改修に向けての整備も行き、イベント開催のため状態を整えた。
- 「建築塾 建物探訪編 古社寺めぐり」(5/14開催20名参加)と「失建築編」(5/28開催21名参加)を開催した。
- アーカイブ作業では瓦全房にある小野鐵之助関連の資料の整理を進めカテゴリごとに分類した。
- 長江エリアの地域情報をリサーチし、記事、地図としてまとめ、「空きプレス」を作成。(3,000部印刷、10月末発行)
- 通年で仮活用を継続実施。
国内外美術家との交流イベント「アフタヌーンティー茶会」(8/1開催33名参加)を実施し、「第2回和作ウィーク」(11/3～13 216名参加)では小林和作ゆかりの画家、丸木スマの展覧会を開催。会期中専門家によるトーク、和作研究会発表のほか、ツアー、活用のためのワークショップを実施した。また、地域大学の茶道部の活動と連携した茶会を開催(2/6開催12名参加)大学生利用者にアンケートを行った。
- 地域小学生との交流を2回実施。見学会(7/7、50名参加)と「竹ベンチワークショップ」(3/6、50名参加)開催。裏庭の整備も開始した。
- 新事業「尾道瀬戸際建築不動産」事業内容の検討とウェブサイト準備を行った。

活動の成果

- 小林和作旧居の価値付けをしっかりと行うため登録有形文化財に申請し、さらに環境整備、改修準備でハード面の大改修に備えることができた。
- 学芸員等専門家が参加する和作研究会を通年で毎月開催することによって、画家小林和作や地域文化に関する多彩な知見を得ることができ、和作ウィークでの発表につなげることができた。また、活用方法についても議論を重ね、丸木スマ展の開催をはじめ、茶会など様々な仮活用企画の立案や次年度以降の再生・活用についての方針や計画を立てることができた。
- 建築塾開催により、これまでなかった新たな視点で尾道の街並みの特長や歴史に対する理解を参加者とともに深めることができた。
- アーカイブ作業では瓦全房にある資料の整理を進めカテゴリごとに分類し、次年度のリサーチに繋ぐことができた。また、次年度の韓国人アーティストとの共同リサーチに繋がることとなった。
- 「空きプレス」では、これまでまとめていなかった小林和作旧居を中心とした長江エリアの地域情報をまとめ、発信することができた。
- 「アフタヌーンティー茶会」、「第2回和作ウィーク」、地域大学の茶道部と連携した茶会など多彩な仮活用イベントの開催を通じ、和作旧居の魅力やエリアの可能性を地域内外に広く発信できた。茶会は参加した多くの国内外のゲストに好評で、丸木スマ展も美術愛好家や地域の方にとても喜ばれた。また茶道部学生からはアンケートによる率直なコメントや感想を得、仮活用イベントの実施後、その成果を今後の文化的活用の方向性の明確化と具体的な運営計画立案に役立てることができた。
- 地域小学生との交流も生徒に好評であり、次年度も引き続き地域学習のプログラムに組み込んでもらえることとなった。
- 新事業「尾道瀬戸際建築不動産」を開始するにあたっての土台が整い公開準備ができた。

今後の課題と展望

今後NPOとしては常に文化的商都尾道らしさを考え、危機に直面している魅力的な建築を保全し、面的なまちづくりを展開していきたいと考えている。この小林和作旧居の再活用のプロジェクトはその上で大事なステップになる。失われつつあった尾道の貴重な文化資源を、これまで培ってきた空き家再生の知識や経験を活かし、次世代に引き継いでいく事例になりうるからだ。これまでの取り組みで旧居の経営上の問題と文化的活用のバランスが具体的に見えてきたので、次年度以降改修や活用をより積極的に行なっていく。今後「尾道瀬戸際建築不動産」事業も展開し、様々な領域の専門家や幅広い世代の参加を促し、知恵を絞り、かけがえのない個別の建物の再生と継承にチャレンジし、面的な町並み保全へとつなげていく計画である。



国内外のアーティストとの交流茶会



「丸木スマ展」展示風景



小学生対象の竹ベンチ制作ワークショップ

| | | | |
|------|--|-------------|----------------------|
| 事業名 | 瀬戸内海の景観と良好な環境を保全し創造する、空き倉庫地活用の「海のdesignコミュニティ」プロジェクト | | |
| 団体名 | UME プロジェクト | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 林 秀俊 | 活動地域(都道府県名) | 広島県 詳細エリア 尾道市浦崎町 |

活動の目的

人口減少率が半世紀で50%を超え、浦崎地区の持つ豊かな海洋文化の継承が課題となっている。地域の多世代交流と関係人口創出の場である UME house うらしま の特徴を活かし、海洋に関わる文化継承と地域資源の再開発に取り組むとともにその魅力を外部にも広く発信する。地区の高齢化率から、今後の地域における生産年齢人口のさらなる低下が予測されるとともに、今後も増加する退職後の高齢者の社会参画への機会創出が求められることとなる。地域人材が活躍しながら外部人材との交流を行い、関係人口の増加と移住促進を図る。上記課題解決に向けて、まちづくりへの主体的な参画を果たす若者世代を育てる事を目的とする。

活動の経過

- 2022年5月1日
UME house オープニング1周年記念セレモニー開催。
オープニングを飾った地域の「神楽の舞」を披露。
寄付でいただいたテーブルを美大生を中心にワークショップ形式でデスクリメイク作業。
- 2022年6月25日～11月3日
海洋環境デザインみなとラボとの協働ワークショップ開催。「海」をテーマにチェキで子どもたちと大学生が撮影に出向き、1回目「ZINE」作成WS開催。
- 2022年9月
地域ボランティアによる、手作りのテーブル・椅子・空き倉庫扉を制作実施
- 2022年4月～2023年3月
地元農家さんの採れたて野菜・地元特産品「無花果」「寒蘭(キャベツ)」などを用いた、加工食品「ドライフルーツ」「乾燥野菜」「ジャム」「ジェラード」をマルシェで販売。カフェも併設し、子ども×若者×高齢者のコラボレーションで販売体験を実施。
- 2022年10月～2023年2月中旬
尾道市立大学美術学部学生と子どもたち・地域の方によるアートプロジェクトWSを毎月4～5回開催。「空き倉庫リノベーション」の一環として、倉庫の扉にアート作品を創作。
- 2022年2月19日
アートプロジェクト完成式

活動の成果

多様な世代の視点・多様な人財の視点から地域で継続的にデザインをコンセプトに、浦崎地区の持つ瀬戸内海海洋環境文化をアートで表現・体現しながら、成果を広く発信すること、また、地元大学美術学部学生とアートを通じた、空き倉庫再生への取り組みを実施。「こども」を真ん中においた地域づくりを多様な人財で構築し、「魅力ある瀬戸内地域のまち」として、若い世代・子育て世代の移住・定住を促進する成果に繋げる事に寄与出来た。
プロジェクトの成果をみなとラボをはじめとする海洋環境関係団体を通して発信することにより、プロジェクト参画者としての関係人口の創出50名、移住促進のための空き家再生リノベーション1件、プロジェクトを通しての移住希望者3世帯が達成出来た。UMEプロジェクトの活動を持続可能なものとし、理念を共有する人財を育成するために、プロジェクトの法人化も行い、組織の安定化を目指す一歩を進める事が出来た。これからの地域の未来に向けて、持続可能な地域社会の構築に取り組み、「質の高い教育をみんなに」「まちづくり」「海の豊かさを守ろう」パートナーシップ」をテーマに「住んでよし」「訪れてよし」の地として広く発信していく事が出来た。

今後の課題と展望

- 自然と触れ合う事を土台にした、地元農家さんとのコラボレーションで、子ども×若者(高校生・大学生)×高齢者の多世代で、畑で作物づくりを行いながら、食育に繋げられる活動を展開していく。
- 地元の特産品「無花果」を使った商品開発を進め、より地域の活性化に繋げていく。
- 地域内外を問わず、地域振興活動を行う他団体との関係性を深める。



浦崎の魅力を伝える「ZINE」制作ワークショップ



テーブルリメイクワークショップ



こどもたちと、美大生(尾道市立大学美術学科)によるアートプロジェクト

| | | | |
|------|------------|-------------|---------------|
| 事業名 | みんなの海シアター | | |
| 団体名 | 一般社団法人あみだす | 実施期間 | 9月10日 |
| 代表者名 | 橋本 康太 | 活動地域(都道府県名) | 広島県 詳細エリア 三原市 |

活動の目的

広島県三原市にある、すなみ海浜公園は、障がいのある方も利用しやすいよう、バリアフリー設計されている。

しかし、すなみ海浜公園は、障がいのある方の利用が多くない。その原因の1つとして、バリアフリー環境についての認知度が低いこと、訪れるきっかけが少なく実際にどんな場所なのかかわからないことが挙げられる。

みんなの海シアターは、映画鑑賞やマルシェをきっかけに、より気軽にすなみ海浜公園を訪れていただき、バリアフリー環境に触れ、知っていただくことを目的としている。

活動の経過

以下の9つを同時進行しながら行った。

- 1 会場の下見
わかりやすく、車いすの方も動きやすい動線になるように、スクリーンやマルシェの位置を検討した。
- 2 イベント名の検討
障がいのある方のための上映会ではなく、障がいのあるなしに関係なく、みんなが楽しめる上映会であることが伝わるようにした。
- 3 上映作品の選定
選定にあたって、子どもからお年寄りまで楽しめるストーリーであること、海での上映が相乗効果をもたらすこと、「障がい」をテーマとして扱っていないこと、字幕付きであることを条件とした。
- 4 チケット料金・購入方法の検討
- 5 デザインの検討(チラシ・ポスター・チケット・会場)
パンパカパン(広島県で活躍するデザインチーム)のみなさんにご協力いただき、親しみやすくあたたかい、家族や友達などにシェアしたくなるようなデザインにした。
- 6 広報宣伝/協賛金・マルシェ出店者・運営ボランティアの募集
- 7 司会者との打ち合わせ
FMみはらでパーソナリティをされている金田さん、早川さんにご協力いただいた。

活動の成果

2023年9月10日(土)に、すなみ海浜公園で、みんなの海シアターを開催した。14時から18時半までマルシェを行い、18時40分ごろから映画「ももへの手紙」(約120分)を上映した。映画鑑賞チケットは200名分すべて完売し、マルシェも含むと、250名以上の方に、すなみ海浜公園を訪れていただくことができた。

マルシェと同時に、海用車いすやビーチマット、最新の車いすの展示・体験を行った。子どもの試乗も多く、楽しんでいる様子が見受けられた。イベントの中で、自然とバリアフリー設備に触れていただくことができた。

また、当日16時から上映開始までの間では、司会の方に、会場の雰囲気盛り上げていただきながら、対談形式でバリアフリーに関することをお伝えした。当法人からは、字幕付き上映や、夏に開催しているバリアフリービーチについて説明させていただいた。ビーチマットを貸していただいた、渋川ユニバーサルビーチプロジェクトの川上さんにもお話をさせていただき、ビーチでのこのような取り組みの意義や魅力が伝わったのではないと思う。視覚的な情報だけでなく、聴覚的な情報があることで、バリアフリー環境の存在に気付くきっかけとなり、参加者から、「へ〜!」「そうだったんだ!」といった声が多く聞こえた。そして、開放的な空間での映画鑑賞は、自由で和やかな雰囲気となった。障がいのあるなしに関係なく、思い思いに海での時間を楽しんでいただける、「みんなの海シアターになった」と感じる。

今後の課題と展望

みんなの海シアターを通して、障がいのある方にもない方にも、すなみ海浜公園のバリアフリー環境について知っていただくことができた。しかし、夏に開催しているバリアフリービーチを広めていくには、障がいのある方により焦点を当てたアプローチも必要であると感じた。例えば、障がいのある方やそのご家族向けに、海に対する心理的なハードルを下げるような企画を行う、サポート体制を充実させていくなどが考えられる。誰もが「海」という選択肢をもっていることが、当たり前になるよう、取り組んでいきたいと思う。



映画「ももへの手紙」上映中



マルシェの様子



海用車いす体験

| | | | |
|------|---|-------------|---------------|
| 事業名 | 上島町における「空き家の利活用による移住促進」を主な事業内容とする NPO スタートアップ | | |
| 団体名 | 特定非営利活動法人 かみじま町空き家よくし隊 | 実施期間 | 2022年6月～12月 |
| 代表者名 | 川畑 良文 | 活動地域(都道府県名) | 愛媛県 詳細エリア 上島町 |

活動の目的

私たち特定非営利活動法人かみじま町空き家よくし隊は、「空き家の利活用による移住促進」を主な事業内容として、2021年10月に愛媛県越智郡上島町において、活動を開始した。①空き家を手入れし、②すぐに入居可能な状態に改修・整備し、③移住希望者に貸し出すことにより、④その家賃収入を次の空き家の改修費に充てる、というサイクルでの事業展開を目指している。当法人の活動の趣旨に賛同していただいた町内の空き家物件の所有者と出会い、当法人に同物件を寄付していただくことが決まった。ただ、当法人は活動を始めたばかりであり、最初の物件を手入れ・整備する原資がなかった。そのため、最初の物件の整備費用を調達する目的で、本助成を申請した。

活動の経過

2022年度の事業年度が始まってすぐ、当該物件の所有者様と登記移転に向けた交渉を開始した。所有者様には、手続きのため上島町まで来ていただくことになったが、山形県にお住まいであり、交通費は当方で負担させていただくことにしたため、事前に想定していなかった旅費交通費が計上されることとなり、その支出は大きなものとなった。

空き家物件の当法人への登記移転は6月6日に無事完了しました。さっそく物件を確認し、敷地内の草刈りと建物内の清掃を行った。特に汚れのひどかった台所については、専門業者に清掃を依頼した。空き家に残置物はほとんどなかったため、残置物の撤去費用として計上していたその他・諸経費の使用はなかった。また、空き家の建物としての状態は良好で、改修は2階のカーペットの張替えと巾木の交換のみで「すぐに住むことにできる状態」となった。そのため、改修に必要な材料や資材の購入費として計上していた消耗品費の使用は、事前の想定約5分の1で済んだ。整備は約2カ月で完了し、8月上旬より、私たちの知人で、上島町に拠点をもちたいと希望されていた方にお貸しした。ただ、物件のガス給湯器が故障しており、その修理費として予算を大きく上回る出費が必要だった。業者にはその支払いを待っていただき、当法人への家賃収入が必要額に達した12月になってから、その費用をお支払いした。この経費は、謝金・委託費・人件費の項目からお支払いした。

活動の成果

本活動の最大の成果は、最初の空き家物件の整備によって、①当法人の実績をつくることができたこと、②毎月の家賃収入が入るようになったことの2点。2022年8月の空き家物件整備の完了は、当法人にとっての一つの節目となり、地元県紙である愛媛新聞に取材していただき、記事として掲載・紹介していただいた。本事業の経費として、当初の想定を大幅に超える額が必要となったため、事業年度中に大幅な収益を確保して次年度に備える、とまではならなかったが、毎月入る定額の収入を確保できたことによって、次年度以降の活動に明るい見通しを抱くことができた。活動名に入れさせていただいた「NPOスタートアップ」を目的とする事業としては、当初の目的を達成することができたと、私たち自身、振り返って評価している。

当法人として最初の整備物件だったこともあり、学んだことが多かった。具体的には、①登記移転の手続き、そして②空き家の整備において、私たち自身の手によりDIYで改修できることと専門業者に依頼することのそれぞれの作業項目と金額だ。当法人では、本年度に本件とは別の事業として、町内の別の島でもう1軒の空き家の整備を行った。そこでは、配電盤の電気工事とトイレの交換が必要となった。本事業の給湯器、そして別事業の配電盤、トイレ交換などは、資格が必要になることから専門業者に依頼するしかない箇所であり、今後の空き家物件探しや評価において、本年度の経験を活かすことができると考えている。

今後の課題と展望

今回の空き家の状態が、専門業者に依頼せざるを得ない箇所があったものの比較的良かったことは幸いなことだったが、私たちのDIYの技術を高めるには作業量が少なかったと感じている。今後の課題としては、次の物件以降の空き家の整備において、DIYの実践を積んで、私たちの技術を高めていくことだ。

今後の展望として、1事業年度につき1軒から2軒の空き家の改修整備を目指している。管理する所有物件が増えれば、比例して家賃収入も増える。そうなれば、改修整備の参加者に正当な賃金をお支払いできるようになって参加者も増え、上島町における空き家の整備事業が加速していくことを期待している。



カーペットと巾木の張替作業



草刈りなど敷地内の整備作業



改修工具を手に作業場で

| | | | |
|------|----------------------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | レモンチェッロ酒造でつなぐウィズコロナ時代の観光構築 | | |
| 団体名 | 株式会社瀬戸内ジャムズガーデン | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 松嶋 匡史 | 活動地域(都道府県名) | 山口県 周防大島町 |

活動の目的

<2021年に立上げたレモンチェッロ(レモンのリキュール)酒造事業の基礎を活かし、アルベルゴディフーズを目標とした地域産業造りを推進する>
2021年から「レモンの丘」を造成し、レモンチェッロ酒造事業を核に地域とつながる関係人口構築に取り組んできた。その活動に参加していただける方々は増えているが、コロナの影響でネット上でつながるだけの方が多くなってしまっていた。そこでafterコロナ時代に気軽に島を訪れ、泊まれる、一棟貸しの古民家宿泊所開設を空き家対策も含めて実施する(リノベーションを行う物件は江戸末期、周防大島に柑橘栽培を伝えた周防大島柑橘産業の祖、藤井彦衛門の屋敷から一部移築された築100年の古民家)。

2023年 3月 旧邸庭園と敷地内の柑橘畑造成工事 完了
2023年 4月 簡易宿泊業開始の届け出を健康福祉センターに提出

活動の経過

●2020年以前の活動状況

(レモンチェッロの商品開発に向けた準備)

- 2018年10月～ 「アルベルゴディフーズ」で地域産業を創る勉強会を開始。イタリアのスローフード運動に詳しい島村菜津先生や金丸弘美先生を講師に勉強会を実施
- 2020年 4月 コロナ禍の中、地域の新しい産業造りのため、周防大島町から内閣府へ「リキュール特区」申請を依頼(同年8月「周防大島果実酒・リキュール特区」認定)
2020年9月 新しい観光造りのメンバー募集と設備資金集めのためクラウドファンディングを開始(11月に283名の参加者を得て終了)
- 2020年 9月 新しい観光造りのメンバー募集と設備資金集めのためクラウドファンディングを開始(11月に283名の参加者を得て終了)
- 2020年10月 酒造免許取得、クラウドファンディングの資金で酒造設備を整え、商品開発を開始
- 2021年 2月 レモンチェッロの初蔵出し、および販売を3月から開始

●2021年度の活動

(「レモンの丘」整備とつながり作り・商品バリエーションの拡大)

- 2021年 4月 レモンの丘を造成、記念植樹祭を開催
- 2021年 6月 ホームページ・ECサイト制作完了
- 2021年11月 第2期製造仕込み開始。ゆず・ライムを使用したチェッロの商品開発

●2022年度以降の活動

(アルベルゴディフーズのシンボル、宿泊産業造りへ)

- 2022年 4月 江戸時代に周防大島に柑橘栽培を持ち込んだ庄屋藤井彦衛門の屋敷跡地と移築した建物の再生・利活用計画を策定、改修開始
- 2023年 1月 古民家改修完了、地域住民の方も手伝っていただいて旧邸庭園と敷地内の柑橘畑化に着手

活動の成果

2021年度は「レモンチェッロの製造・販売の基礎構築と交流の仕組みづくり」を実施することができた。その基礎を活動の成果(800ベルゴディフーズ)産業を構築するためにファーストペンギンとして尽力した。

具体的成果は下記の通り。

- 1 周防大島の柑橘産業の祖、藤井彦右衛門の息吹の感じられる古民家を未永く存続させるとともに、多くの人々が集う場に再利用することを目的に、古民家の修繕・改築を行った。経済的に維持管理が可能になるよう、単なる修繕ではなく、「一棟貸しの宿」として使用できるように改築を実施した(2023年1月完成)。
- 2 消防用設備等検査済証取得済み、柳井健康福祉センターに簡易宿泊業の申請を提出済み(宿名:おん宿 古今せとうち)。今後 5～6 月に免許証交付見込み。2023 年夏から宿泊事業を開始する予定。
- 3 旧邸跡地の庭園改修と柑橘畑化は地域住民の方々の手伝いもあり完成(2023 年 3 月)。途中、隣接地(2筆)の提供が地域住民からあり、計画エリアが拡大したため、その部分については今後の取組となった。
- 4 島内ゲストハウスにてレモンチェッロの取り扱いが4軒増加。島のお酒として知名度拡大に今後も取り組んでいく。
- 5 新しいレモンチェッロとして「ブラッドオレンジ」を使用したバージョンを開発・商品化した。

上記以外に、レモンチェッロプロジェクトの効果として、島内ゲストハウスの経営者の方々と話す機会が増え、今後、アルベルゴディフーズの取組を推進していく組織を立ち上げたいという意向でまとまりつつある。一事業者の取組として始めたレモンチェッロプロジェクトではあるが、島内の農業者・宿泊事業者・体験型旅行提供者などを巻き込み、新しい動きへと発展しつつある。

今後の課題と展望

コロナ禍のこの3年間、当プロジェクトで取組んできた「100年続く地域産業造り」は、コロナがなかったとしても、この過疎の島が本来行わなければならない取組みだったと考えている。今回達成できなかった、輸出、地域内事業者とのコラボ企画は次年度以降に順次取り組んでいく。さらに今後は、地域内の多様な事業者と連携し、アルベルゴディフーズ産業をより強固なものに仕上げ、一過性の観光から脱却し、地域のライフスタイルを楽しむ観光へ、持続可能な地域づくりへと取り組んでいく所存である。

この時代、このタイミングで出会うことができた福武財団とご縁に感謝している。



地域の方々と庄屋の庭再生周囲はレモン畑に



人々の集う場へ改築した古民家



「おん宿 古今せとうち」由緒書き

公益財団法人福武財団

地域振興助成
2022年度自主・共催助成
成果報告書

Fukutake Foundation

| | | | |
|------|--|-------------|----------------------------|
| 事業名 | 大地の芸術祭事業(越後妻有 大地の芸術祭 2022・「大地の芸術祭の里」越後妻有 2023 冬) | | |
| 団体名 | 大地の芸術祭実行委員会 | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 関口 芳史 | 活動地域(都道府県名) | 新潟県 詳細エリア 越後妻有地域(十日町市・津南町) |

活動の目的

大地の芸術祭は、「人間は自然に内包される」というコンセプトのもと、現代アートを通じて人と自然の関わり方において新しい価値を生み出し、国内外の文化交流人口を増加させることで地域振興を図る。また、過疎高齢化が進む越後妻有地域において、地域に内在する価値を、現代アートを媒介として掘り起こし、その魅力を高め、世界に発信し、地域再生の道筋を築くことを目的とする。今回新たな取組として大地の芸術祭を長期開催し、四季を通じた企画展を実施することで、季節ごとに移り変わる本地域の魅力を発信し、通年誘客促進を試みる。

活動の内容

越後妻有 大地の芸術祭2022は、4月29日から11月13日までの計145日間開催した。過疎高齢化が進む日本有数の豪雪地である十日町市・津南町からなる越後妻有地域全域にアート作品を展開し、期間を通して様々なプログラムを企画・実施した。越後妻有地域は、「十日町」「川西」「中里」「松代」「松之山」「津南」の6つのエリアで構成されており、約760km²の広大な地域を巡るなかで里山の暮らしぶりを体感することができる。加えて、芸術を五感で楽しめるよう、地元食材を使った郷土料理を提供するレストランや各種バスツアーを用意した。また、大地の芸術祭 2022の会期外である冬シーズンにおいても企画展「大地の芸術祭の里」越後妻有2023冬を実施し、通年誘客促進を図った。

参加作家、参加人数

大地の芸術祭2022では、38の国と地域から263組のアーティストが333作品を圏域全体で展開し、入込客数は計574,138人を記録した。また、準備活動と会期運営のため延べ活動人数で901名ものサポーターから参加いただいた。

冬の企画展では、入込客数が6,287人となり昨年比160%であった。

他機関との連携状況

特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構と芸術祭の開催を連携して実施した。新潟県からは事業実施に関して側面的な支援をいただいた。また今回はじめて、企業単位で作品受付に入る企業サポーターの取組を始めた。

活動の効果

2019年度から2022年度における新潟県内の経済波及効果は82億6,100万円となり2018年度の前回展を上回った。例年の開催日数約50日に対し今回は計145日間開催し、入込客数は前回展より4.7%増加。長期開催における運営方法など、次年度以降の通年誘客化の足掛かりをつくることができた。また、新型コロナウイルス感染拡大が収束しない中での開催となったが、コロナ対策としての長期開催や人数制限が、過度に混雑を生まない環境での文化芸術体験の仕組みとなり、お客様満足度が向上した。

活動の独自性

2000年から開催している大地の芸術祭は、アート作品、作品展示場所の自然・風景・食・地域住民との交流など、越後妻有の里すべてを含めたものを「アート」として展開している。来訪者はリピーターも多く、国、地域、世代、ジャンルを超えた人々の交流と協働が、過疎高齢化が進む本地域に新たな価値を生み出している。そんな大地の芸術祭は、今や国内外から50万人超が訪れる世界最大級のアートフェスティバルとなった。現代アートを媒介にした広域連携による地域づくりに取り組む先駆者として、経済効果や交流人口・関係人口の拡大を地域にもたらしている。

総括

- 総入込客数及び経済波及効果は、コロナ禍での開催であったが過去最高を記録した。経済波及効果については、3つの主な要因(開催延期による算出対象年1年増、長期開催、清津峡深谷トンネル入込増)が好影響となったと分析する。
- インバウンドに関しては、コロナ禍により2018年と比較して日本への海外来訪客が大幅に減少し、海外メディア露出や海外来訪者数は前回展を超える成果を出すことができなかった。
- 初めて大地の芸術祭を長期開催したことにより、通年誘客化に向けた長期間運営を経験することができた一方、二次交通の整備や会期全体を通じたサポーター確保などの課題が表面化した。
- 国の指針に準じた「大地の芸術祭の里 新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」を策定し、実施することで会期を通してクラスター発生等なく運営することができた。
- 2023年については、2024年に控えた第9回展に向けて、今回展の課題解消に対する検証を行いつつ通年誘客を見据えたキャンペーンを展開し、併せてインバウンドへの受入体制を構築する。



イベント
田中泯「場踊り」の様子
Photo by Nakamura Osamu



清津峡深谷トンネル
マ・ヤンソン/MADアーキテクト
Photo by Nakamura Osamu



2023 冬 オフィシャルツアー「雪見御膳」の様子
Photo by Nakamura Osamu

| | | | |
|------|------------------|-------------|----------------------|
| 事業名 | 豊島「食プロジェクト」推進事業 | | |
| 団体名 | 豊島「食プロジェクト」推進協議会 | 実施期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日 |
| 代表者名 | 濱中 幸三 | 活動地域（都道府県名） | 香川県 詳細エリア 土庄町豊島 |

活動の目的

豊島における棚田をはじめとする山の幸と瀬戸内の地魚である海の幸などを活用し、食とアートの活動を展開することにより豊島の振興を図ることを目的とする。地元の住民、観光客、豊島美術館が一体となったプログラムを開発し、地域振興のための複合的な活動を続ける。

活動の内容

復元した棚田において、引き続き農作物の栽培と景観の維持管理を中心に活動を行った。年に3回、唐櫃棚田保存会、土庄町（土庄町地域おこし協力隊）、豊島美術館を運営する公益財団法人福武財団が一堂に集まり、「水路清掃」を行っている。

棚田で収穫した米や野菜を島内の飲食店に販売するとともに、軽トラックの荷台に収穫した野菜等を乗せ、島内で移動販売を実施している。また、収穫した野菜等を活用した商品化にも取り組んでいる。

新型コロナウイルス感染症が流行して以降、医療資源の乏しい豊島にあって影響を考慮し、主催する田植え・収穫体験等のイベントにおいて参加者を島内の住民に限定していたが、2022年からは島外からの参加者を募り活動を活発化させた。

活動の成果

2022年は、新型コロナウイルス感染症の影響が小さくなったことに加え、瀬戸内国際芸術祭の開催年であったこともあり、国内外から多くの観光客が豊島を訪れ、豊島美術館とその前に広がる当団体が維持管理を行う棚田にも多くの観光客の姿が見られた。

棚田で行う収穫体験イベントの開催は、新型コロナウイルス感染症が流行する以前の規模までは戻せなかったものの、島外からも参加者を募り、田植え体験、さつまいも収穫体験、みかん狩り、収穫祭（稲刈り体験・綿つみ体験）のイベントを開催した。美しい景観の中で行うイベントは大変好評である。

特に、棚田で行う最大のイベントである「豊島棚田の収穫祭」では、稲刈り体験等の収穫体験のほかに、キッチンカーや地元飲食店による食のマーケットも開催、棚田のステージでは地元の子どもたちによる演奏を行い、島内外から約500名の来場者があった。

また、棚田で収穫した作物を使った商品開発にも積極的に取り組んでおり、既存のみかんジュースに加え、棚田で収穫した古くなった米を利用した「米粉」や「米粉のパンケーキミックス」を委託製造し、豊島美術館や豊島マルシェで販売した。この商品は、土庄町のふるさと納税の返礼品にも出品した。

今後の課題と展望

福武財団の助成金や土庄町の補助金に頼った運営になっており、安定的な活動の持続へ向け、オリジナル商品の販売等による自主財源の確保が課題である。

また、発足から10年以上が経過し、当初棚田を耕作・保全していた者も、年齢を重ね、高齢化していることから、新たな人材の確保も急務であると考えている。



田植え体験



収穫祭のマーケット



稲刈り体験(収穫祭)